

---

# とある外道最低系主人公の話

十五夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある外道最低系主人公の話

### 【Nコード】

N0619Z

### 【作者名】

十五夜

### 【あらすじ】

神の失敗によって理不尽に殺された主人公は理不尽に殺された事への怨みを来世にぶつける事にした。

これは外道最低系主人公が成長する物語。

第1話『神様転生の神様ってなんの神様？ 日本には八百万の神様がいるし、転

うん、ちょっとした暴走なんだ。温かく見守って下さい。

第1話『神様転生の神様ってなんの神様？ 日本には八百万の神様がいるし、転

「え？」

気が付けば知らない場所にいた。

気が付けば知らない場所にいた、なんてフレーズを現実で使う事があるとは思ってもみなかつたけど実際にあるのだから仕方ない。

誘拐かと思つたがこの場所と例えていいのか解らないただ真っ白で何も無い白い空間は明らかに非現実的で思つたより冷静だった。

何処かこれから始まる物語の導入部を見せられている様な感覚だった。

『おお、九郎よ。死んでしまつとは情けない……』

「え？」

今度は二重の意味での眩き。誰もいないのに頭に響く様にして聞こえてきた声とその声が発した言葉がドラゴンをクエストしないRPGの勇者がゲームオーバーした時に表示される台詞。

『ふむ、日本男子たるもの誰もが察するであろう死刑宣告を理解せぬとはなんたる事か！ ああ、分かった。神であるワシにこう言わせたいのだろ。ちよつとした手違いでおぬしを殺しちゃったから許してね。サービス付きで転生させてあげるから』

何故か逆ギレされた。何処からともなく頭に響いてくる声に超越的な何かを感じるので自ら神と名乗るこの声は本当に神様なのだろう。随分と俗物的な神様である。

言わせてもらうが日本男子全てが王様の台詞を知っている訳じゃない。それに俺はホイミ派ではなくケアル派だ。

「……………よし、把握した。転生型オリ主ですね」

俺の中に眠る二次元知識はすぐさま答えを得る。<sup>オタク</sup>

「死んだ覚えは無いんですが？」

『いや、それがさ。暇で仕方なくて暇つぶしを探してたら丁度、布団で寝ていたおぬしが目に入っただんでおぬしの普通に幸せな家庭を作って死んでいく平凡な人生を波瀾万丈で刺激的な人生に変えてやろうと思って運命を色々いじくって遊んでたら湯飲みの中にあるお茶を零しちゃっておぬしの運命が消えちゃった訳だよ。一応、神様だし、おぬしが『有り得たかも知れない運命』程度にしか波瀾万丈な人生に変えて無かったんだけど運命が消えちゃって面倒だし、人が一人消えた所で世界は廻りつづけるからおぬしの存在消しちゃった』

テへ、と語尾に付きそんな態度で告げる自称神様。

『まあ、おぬしも平凡に生きていくよりサービス付き転生の方がいいじゃろ？ 暇だからどんな設定の要望にも答えてやるぞ？ 転生する世界だっておぬしが決めてくれてよい。やはり需要と言う意味では魔法少女リリカルなのは、魔法先生ネギま！、ゼロの使い魔、その辺りが手堅いかの。ISや恋姫無双辺りも頭角を表してきてお

る。マイナーな作品を狙うのも良いが余りオススメはせん』

いったい何の話か俺には分からない。

『なに、メタ発言と言っやつじゃ。そう気にするな。さて、何を望むんじゃ？』

「じゃあ……」と言って気軽に頼むと思ったか。ここは慎重に選ばなければいけない選択だ。

まずは転生サービスではなく、産まれる世界の指定。

譲れないのはそれなりの文化水準で平和な世界。

ゼロ魔や恋姫？ 馬鹿を言え。あの世界の移動は馬や徒歩だぞ。現代のモヤシツ子である俺が堪えられるか。電気がない生活とか無理です。

次に必要なのは原作知識の有無。神様がオススメした内残るリリカルなのはとネギまは知っているがISはアニメの知識しかない。

そして最も重要であるキャラクター。せっかく転生するのだからハーレム作って女の子とキャッキャウフフな事をしたい。そうなると重要なのが主人公の有無。リリカルなのはなのはにネギまのネギ、ハーレムで女の子独占を目指すならリリカルなのはで決定なのだが少し待ってほしい。

俺に異性が好意を抱く程の魅力があるかと聞かれたらハーレムを作りたいと言っている時点でダメだろう。むしろ最低の部類だ。ぶっちゃけた話、俺の狙うハーレムは肉欲の発散を前提とする最低な

モノなのでキャラクターは二の次、アクセサリー感覚で女の子をハーレム入りさせる事もあるだろう。

それに同じ作品を扱うな、と電波を感じた様な気がするし。

それにネギまはネギ・スプリングフィールドという男の主人公が存在するが確実に数名のヒロインを籠絡する自信がある。

何故ならネギがヒロインを落とした行動をそっくりそのままトレースしていればヒロインを籠絡出来るのが道理である。

その場合は最低でも転生サービスでネギと同等のスペックにしてもらう必要があるが。

寝取り？ 何を言うか。ネギが行動を起こす前に俺が行動を起こすのだから何も問題はない。むしろ、原作を見るかぎりネギは父親に向けてまっしぐらなのでネギに好意を向けているヒロイン達も報われぬ恋をするより俺に可愛がられた方が良いに決まっている。

うん、自分で思っけど完全に最低系主人公の思考だわ。まあ、理不尽な死因なんだし、来世で最低な事をして神様が許してくれるさ。

『うむ、中々の外道っぷりじゃが全て許す。むしろ、もつと突っ走ってネギを女体化、不老不死設定を付けて前大戦でアリカ姫とテオドラ姫をハーレム入り、本編前にフェイトガールズを回収、ハーレム入り、世界観が繋がつとる事を利用してＡＩが止まらないやラブひなからヒロインハーレム入り、本編中に地球編、魔法世界編に出てくる女性全てをハーレム入りさせるぐらいの事をせんか！ それこそ本物の外道最低系主人公と言うやつじゃ！』

そんな事を自信満々に言い切る自称神様の方がよっぽど外道である。それに俺にだって守備範囲というモノがある。

まあ、それもいいかもしれないが。

とりあえず、転生する世界が決まったら望む転生サービス。

真っ先に望むのは主人公体質。なんたってあの世界はストレスフリー（笑）な世界だ。どんなセクハラもギャグへ変化し、どんな不幸も女の子を落とす為の過去へ変わる、どんな敵との戦いも修業で終わる、生活費に困るとかも無いだろう。

後、確実に欲しいのは不老不死と痛覚遮断、完全記憶能力は譲れない。

不老不死と痛覚遮断は死にたくないのと痛いのが嫌だから。不老に關してはなるべく自分の意志で外見年齢を変えた方が良い。それが不老と言っているのか分からないけど。

完全記憶能力はヒロイン達のあられない姿を脳に記憶しておく為。

ニコポとナデポも欲しいがニコポは止めておいた方がいだろう。

ニコポの効果が絶大で自分の笑顔を見た異性全てがハーレム入りする事になったら笑い事じゃない。日常的に笑ってはいけないとか拷問でしかない。それに比べてナデポなら自分の意志で相手を選べるので安心だ。

日常系はこれくらいで後は戦闘系。

とりあえず、このかの十倍の魔力とラカンの十倍の気、カンカホウ



を出来る様になりたいし、神鳴流も使いこなせる様になりたい。魔法も西洋、東洋関係なく全て使える様になりたい。拳法とかも使える様になりたいけど人を手で殴るとか痛そうなのであんまり乗り気ではない。

外道最低系主人公を名乗るみたいな空気が流れているのでこれぐらいのスペックは必須である。

まあ、こんなもんだろ。

『では、全ておぬしの望む通りにしよう。次の人生に幸あれじゃ』

そうして俺は暖かい光に包まれながら意識を手放した。

第2話『転生するうえで最も強大な敵は日常生活の中にある』の巻（前書き）

転生した人間は前世の家族と転生先の家族。その苦悩があってもいいと思うんだ。

## 第2話『転生するうえで最も強大な敵は日常生活の中にある』の巻

幼稚園に上がる頃からだろうか、俺はこの世界に違和感を感じていた。

図書館島と呼ばれる島一つをその名の通り図書館にした巨大施設。

自重で折れても可笑しくない筈なのに強くそびえ立つ学園のシンボルである世界樹。

毎年楽しみにしているけど明らかに異常な完成度を誇る学園文化祭。

どれもが普通の生活に組み込まれた普通の事だったけれど俺はその生活に違和感を感じながら生活していた。

そして致命的だったのが小学校を卒業して中学校に入るまでの春休み、この世界に違和感を抱きながら暮らしていた俺は前世の記憶を全て取り戻した。

違和感の正体はこの世界にとって俺が一番の異端児だったから。

ここは前世の俺が望んだ通り、『魔法先生ネギま！』の世界だった。

「ふあゝ」

……………なんだか当の昔に乗り越えた筈の事を思い出していた気が

する。

そんな事を思いながら目を覚ました俺は冬の寒い朝の空気と布団の暖かいまどろみとの戦いを心の中で行いながらトントンと軽快な音を立てている台所の方へ視線を向ける。

「あ、やっと起きた？ 早く布団から出なよ。そろそろ朝ご飯出来るから。今日も新聞配達の仕事があるんだろ」

エプロン姿でこちらに振り向いた男の名前は諸星司。同じ部屋に住む俺の親友にしてクラスメイトだ。

料理が好きな人間なので食事や食器の管理は司が部屋の掃除やそのほかの家事は俺が担当している。

「分かったよ……」

俺の胃袋を握っている人物で逆らえない人間の一人だ。

「アスナには手は出さないから安心しろ」

「な、な、なんの事を言ってるのさ！」

布団から出て着替えを済ませた俺はイスに座って、机に並んだ朝食を箸でつまみながらぼつりと呟く。

面白いぐらいに狼狽する司を見て溜め息一つ。今のやり取りで分かるところが司は神楽坂明日菜の事が好きである。

原作に諸星司なんて名前は一度も出てきていないから本来なら報わ

れる恋で終わると思うがこの原作は俺がぶっ壊す。<sup>セカイ</sup>

少し勿体ない気もするがヒロインの一人くらいくれてやる。前世の俺は主人公のネギから寝取り上等と言っていたが目の前で純粹に好意を抱いている親友から寝取るとか俺のチキンハートでは無理だった。叶うなら上手くいつて欲しいと思えた。

「って、時間じゃねえか！」

朝食を済ませ、ホッと一息ついた俺は時計を見て慌てて立ち上がる。

「行ってきます！」

「ん、行つてらっしゃい……」

靴を履き、部屋を飛び出すと今だのんびりと味噌汁を啜っている司から返事が返ってくる。

「すいません！ 遅れましたか！」

「んや、まだ大丈夫だよ……」

まだ薄暗い道を全力で走り抜ける事数十分、飛び込んだ新聞屋さんには既に自分と同じ様にアルバイトの同僚が集まっていて、皆で温かい飲み物を飲んでいた。

「んじゃ、これが今日の分な。よろしく頼むぞ……」

自分も集まりに混ぜてもらう事数分、配達を始める時間となり、配る新聞を受け取ると同じ様に新聞を受け取っているアスナの方を見る。

「いつもと一緒に早く配り終えた方に飲み物一本な」

「いいわよ、今日も奢らせてあげるから」

ふふんと鼻を鳴らすアスナに肩を竦める。本来、ヒロインであるアスナを落とす為に持ち掛けた同い年での配達勝負、司に譲ると決めた時から無駄な習慣に成り果てているが今更止めるにやめれなかった。

「んじゃ」

「よーい、スタート！」

アスナの掛け声と共にお互い別の方向に向けて走り出す。

競争しているが間違えない様に一軒一軒丁寧に。

新聞配達のアルバイトをしているのはアスナに近付く為だけじゃない。自分で自由に使えるお金を稼ぐ為である。

何故なら自宅から十分麻帆良学園へ通えるのにわざわざ寮生活にして貰っているからだ。学費や寮のお金を出して貰う代わりに生活費は自分で稼ぐ。それが両親との寮生活をする上での約束だった。

アルバイトは少しだけ辛いと思う時がある。それでも自宅にだけは

居たくなかった。

信じられないくらい美人で優しくて料理も上手い母親にイケメンで何の仕事をしているか知らないけど高給取りな父親、お兄ちゃんお兄ちゃんとなつてくる美少女な二つ歳下の妹。恵まれた環境、理想的な家族。それがどうしようもなく  
気持ち悪かった。

俺にとっては家族だったけど前世の記憶を取り戻した俺にとってこの理想的な家族は赤の他人だった。

母親だけど母親じゃない、父親だけど父親じゃない、妹だけど妹じゃない人達が俺を家族として扱っている。それが堪らなく気持ち悪かった。

前世の両親はクレヨンしんちゃんに出てくるヒロシとミサエで、妹はドラエもんに出てくるジャイ子、そんな家族。

どうしようもない家族だったけどそれが俺の家族だった。

失ってから分かったけど俺が一番心安らぐ暖かい家族だった。

自称神様と会話をした時、泣いて喚いて土下座をしてでも頼むべきだったんだ。転生サービスなんていらぬ。だから、元の世界に戻して欲しいと。

家族の絆、自分の居場所。口にするのも恥ずかしいそんな言葉の数々。目先の欲にかまけて自分から捨てたモノ。

永遠に失ってから気付いた大切なモノ。

「あ……」

気が付くと頬に涙が流れていた。

もう止めよう。永遠に失ったのだから二度と手に入らないから。

過去を振り返らずに未来を見据えて。

主人公体質持ちなんだからそれぐらい簡単に出来ると言い聞かせて  
そうしないと心が折れそうだったから。

そしていつものようにアスナに飲み物を奢る事になり、世間話をし  
ていた時に聞いたのだ。

今日はこのかが頼まれている新人教師の迎えについていくと。

原作の

セカイ  
物語が動き出す音が聴こえた。



## 第2話『転生するうえで最も強大な敵は日常生活の中にある』の巻（後書き）

ネギまなのに何故かFATE式ステータス表

筋力：E以下（一般人レベル）

耐久：E以下（一般人レベル）

俊敏：E以下（一般人レベル）

魔力：E以下（一般人レベル）

幸運：A

宝具：そんなもんねーよ

保有スキル

主人公体質：EX

ストレスフリーな世界観に対して絶大な力を発揮する。異性のおっぱいを揉んだり、おっぱいに顔を突っ込んだり、押し倒したり、裸を見たり、お尻を触ったりしても異性に嫌悪される事なく、ギャグで全てが済まされる。普通に生活していてもイベントに巻き込まれ、無意識の内に少年マンガの主人公みたいな行動をする。このランクになると加護ではなく既に呪いである。幸運のランクをAに固定する。

不老不死：EX

死なない、老いない。それだけ。

痛覚遮断：E X

どんな怪我をしても痛みを感じず、一定の実力を発揮する事が出来る。

完全記憶能力：E X

見たものの全てを記憶する能力。

気：E X

使用量によって筋力・耐久・俊敏のステータスランクを上げる。技や術を扱う事も可能。

魔力：E X

使用量によって魔力のステータスランクを上げる。対魔力のステータスを得る事が出来る。技や術を扱う事も可能。魔法によっては筋力・耐久・俊敏のステータスランクを上げる。

ナデポ：E X

異性に対して有効。頭を撫でたらポツとなる。加護ではなく完全に呪い。

無限の修練：E X

本人の『やる気』と『努力』さえあればどんな技術であろうと習得出来るスキル。『努力』をすれば確実に応えてくれるが逆を言えば本人が『努力』しないかぎりなにももたらさない。

うん、ずらりとならぶEXスキル。外道最低系主人公に相応しいステータスです。

注・Fate式ステータスですがステータスの基準はネギ魔世界観で割り振っています。（EX↗Aが赤き翼クラス、B↗Cが一流魔法使いクラス、D↗Eが見習い魔法使いクラス）

### 第3話『ニコボとナデボを乱用するとラブコメでなくギャグである』の巻

「おし、今日整理する分はこれぐらいで大丈夫だよな」

「はい、後はコレを運べば今日の部活は終了でいいと思います。私は少し予定がありますので……」

机の上に高く積み重ねられた本の数々を指差して告げる夕映の言葉に溜め息一つ。

「おい、待てコラ。力仕事は男子の仕事ってのは分かるが少しは手伝えや。何、帰宅モードになってやがる。珍しく一人で部室に来たと思ったら本を読んで帰るとは何事か」

図書館探検部 図書館島の探検を目的に設立された部の部室で帰ろうとしている綾瀬夕映を取っ捕まえる。

「のどかは学園総合図書委員の仕事、パルは新任の先生の歓迎会準備で忙しいのです。そろそろ時間ですし、私もクラスに戻りたいんですが？」

「分かった、分かった。中等部の近くまででいいから手伝え」

少し不服そうな表情を浮かべながらも頷いた夕映を伴って大量の本を抱えて図書館島へ向かう。

図書館探検部の仕事はその名の通り、図書館島を探検する事だ。しかし、それと同時に一般生徒が借りた本が少し危険な場所にあるの

なら一般生徒の代わりにあった場所まで本を戻すのも図書館探検部の仕事である。

今日の部活動は部室に溜まっていた返却予定の本を図書館島まで運ぶ事である。

「そついえば新任の先生ってどんな人なんだ？」

何気ない会話の中で情報収集、これは重要である。

「若い、恐らく十歳前後の小さい『女の子』です」

図書館島へ向かう間の会話、想像はしていても本当にやるとは思っていなかった。主人公の女体化とか誰得だ。宣言しておくが俺に口リの趣味はない。

「さて、中等部に着いたので私はこれで」

その後も適当な世間話をしながら夕映と歩き、約束通り女子中等部の近くまで来ると夕映に持って貰っていた本を預かる。

「手伝いありがとよ」

「いえ、それほどでも……」

ペコリと頭を下げた校舎に入っていく夕映を確認すると再び図書館島に向けて歩き出す。

「ん？」

夕映と別れて図書館島に向かう事数分、俺の目の前をふらふらしながら歩いている見覚えのある後ろ姿を見つける。

「おい、のどか。少し手伝ってやろうか？」

「はう！」

声をかけた俺の言葉にビクリとなって本を落としそうになっているのは宮崎のどか。

「少しは慣れるよ」

「す、すいません……」

「いや、謝らなくていいんだけどさ」

俺が図書館探検部に入ってもうすぐ二年、いくら男が苦手だといってもそろそろ慣れてくれてもいい頃だろう。

「少し持ってやろうか？」

本当にふらふらしているのどかの姿を見て一言。

「いや、でも……」

「そんなにふらふらしてたら、本を落として痛めるぞ」

確かに俺はのどかより多くの本を抱えているがこれでも男子。のどかの持つ本の半分ぐらいなら持ってやれる。

「お、お願いします」

本を落として痛めるという脅しが聞いたのか、オドオドしながらも手渡して来たのどこから本を受け取る。

正直、ちよつときつくなってきた。

のどかとはほとんど話すネタが無く、黙々と移動していると前方に長い階段が見えてきてふと気が付く。

もしかしてこれが階段から落ちたのどかをネギ君が助けた場面？

原作ブレイクのチャンスだ。つーか、一般的な常識で考えて女子に手すりのない階段の外側を歩かせる訳にはいけないのでさりげなく外側へ移動する。

それにしてもこの原作ブレイクは大丈夫何だろうか？ 確かのだかを魔法で助けた事によってネギはアスナに魔法がバレた覚えがある。そんな事を思いながら階段を下り始めた時だった。

チラリと視界の端に赤毛の『少女』が見えたと思った時いきなり突風が発生し積み重ねて持っていた本の上が少し傾く。

「あ」

バランスをとる為に身体を動かした瞬間、片足が存在する筈の地面を捉える事なく足を滑らせる。

物事の全てが遅くなる感覚

足場はしっかりと確認していた

し、踏み間違える筈が無い。もしかしてこれが修正力という奴なのか？

チラリと見えた赤毛の『幼女』に俺が助けられるとは思わない。だけれど、のどかが　女の子が階段から落ちなかった事は誇っていい原作ブレイクだと思うんだ。

それに本を落とすとのどかを脅かした俺が本どころか自分ごと階段を踏み外して落ちるとか恥ずかしすぎる。

修正力もなんでここだけ律儀にイベントを起こすんだ。世界って実は馬鹿なのか？　最も治さなければならぬ主人公の性別が逆ですよ。あんな自称神様の介入に負けるなよ。

俺が記憶を取り戻した時期からして大戦で確保できたヒロインやフエイトガールズのイベントは消化され、世界観を共有する他作品のヒロイン達のイベントも消化されているだろう。

そんなところに修正力を使うならせめて主人公の性別くらい護りきれよ、世界。

結構高い位置から足を滑らせたので強い衝撃と捻挫以上の怪我を覚悟した上での現実逃避。

しかし、覚悟した衝撃が身体を襲う事はなく、ちょっとした浮遊感と共にストーンと地面に腰を下ろす。

そして目の前には自分より大きい杖を掲げている赤毛の『幼女』。

「だ、大丈夫ですか！」



「ああ、大丈夫だ。心配してくれてありがとな……」

綺麗な赤い髪にくりつとした丸い瞳、人形のように整った顔立ちは将来美人になる事を予感させる。

幼女の余りにも必死な表情と想像を超えた美少女さにほうけていた俺は心配させない様に立ち上がると服についた土を払い落とし、笑みを浮かべるとなんとなく撫でやすい位置にあった頭を『撫でて』しまっ。

「ちよつとごめん！」

次の瞬間、ポツと幼女が頬を赤く染めた気がしたがそれを確認する前にまるで嵐の様に現れたアスナが幼女を持ち上げるとそのまま去っていく。

「な、なんだっただ？」

「さ、さあ……」

慌ててこちらに寄ってきたのどかと視線があって一言。のどかからの返事は首を傾げるだけだった。

結局、盛大に本をぶちまけた俺は部活の先輩と顧問の先生に怒られたただけ言っておこう。

それは本当に偶然だった。

初めての授業をなんとか終えたボクはちょっとした広場の噴水に腰をかけて、授業の反省をしていた。

そんな時、ボクのクラスの生徒さんである宮崎のどかさんと見知らぬ男性が肩を並べて歩いているのを見かけた。

勝手に持っていた第一印象で大人しい人だと思っていたのどかさんが男性と歩いている、少し驚いたけど何気ない男性のしぐさを見ているほどと関心した。

男性はたくさんの本を抱えている割にはのどかさんが歩きやすい歩幅に合わせて歩きながら、少し長い階段が近付いてきたらスツと不自然では無い程度に階段の外側へ移動してのどかさんを階段から落ちない様に誘導していた。

英国紳士の精神に通じる気配りの良さである。

そんな風になんとなく階段を下りている二人を眺めていたら一瞬だけ男性と目が合った気がして心臓がドキリと高鳴った。

そして次の瞬間、強い風が吹いたかと思うと男性が足を滑らせて階段から落ちていた。

ボクは慌てて背中に背負った杖を男性に向けて一瞬だけアスナさんの事を思い出す。やたらめったら魔法を使えばアスナさんの様にボクに疑いをかけてくるかもしれない。下は芝生になっていたし、ボクが助けなくてもそんな大きな怪我はしない。

そう心の中で言い訳する様に言い聞かせたボクは気付いたのだ。

男性が自分の心配ではなく、のどさんが無事である事を確認して『笑っている』のを。

気が付いた時には魔法を使っていた。

魔法を秘匿しなければならぬ理由は分かっている。昔に起きた魔女狩りを見れば明らかだ。

だけど目の前に魔法で助けられる人がいて、魔法の秘匿の為に魔法を使わないという答えをボクは持っていなかった。

魔法の秘匿より人助け。ボクの目指す『立派な魔法使い』 マギ  
ステル・マギはそんな困っている人を助けられる人物だった。

「だ、大丈夫ですか！」

「ああ、大丈夫だ。心配してくれてありがとな……」

目をパチクリさせて何が起きているのか分からないといった表情を浮かべてボクの方を見て立ち上がると笑みを浮かべて優しく頭を撫でてくれた。

次の瞬間、心臓がバクバクと高鳴り、顔を赤く染めてしまう。

「ちよつとごめん！」

ちょっとした浮遊感と共に見えなくなっていくあの男性を見ながらアスナさんに感謝する。

少し離れた茂みに入ってアスナさんが何か色々言っているけど頭に入ってこない。

「あの人の名前……」

「ん？ 九郎の事？」

ふと呟いた言葉にアスナさんが反応する。

「知ってるんですか！」

「え、ええ、脇屋九郎。それなりに良い奴よ」

「九郎さん……」

その名前を忘れない様に心の中で呟く。

「あいつがどうかした？」

「あの、その……」

口ごもる。このドキドキが何か分からなかったから。

「あの人の事を思い出すと心臓がドキドキするんです」

今までに感じた事の無い感覚。

「あゝ」

そんなボクの言葉にアスナさんは何か理解したみたいで片手を額において天を仰ぐ。

「ふう、あんたも女の子だしね。自分で何なのか分かってないみたいだし、私が教えてあげるわ　、『一目惚れ』って言うのよ。その感情は。大切にしなさい、女の子にとって初恋ってのは大切なモノなんだから」

天を仰いでいた手をビシとボクに突き付けながらどうしようもないような　　それでいてどこか笑みを浮かべていたアスナさんがそう言った。

第3話『ニコボとナデボを乱用するとラブコメでなくギャグである』の巻（後書）

主人公がTSされるとハーレムに入れられる法則。

#### 第4話『惚れ薬とは男の浅ましい欲望の夢』の巻

「うう……、なんだってこんな目に……」

昨日、盛大にぶちまけた本の一部を両手に抱えて歩いている俺は居心地の悪さに溜め息を漏らす。

何故なら今俺が歩いているのは女子中等部、男子禁制の女の園だ。勿論、忍び込むのではなくやましい事がある訳ではないので正面玄関から堂々と。

そんな場所で男子一人が堂々と歩いているんだから周りから視線も集まる。

昨日は俺とのどかの二人ともすっかり忘れていたのだが、俺が盛大にぶちまけた本の中にはのどかから預かっていた『女子中等部に貯蔵』されている筈の本もあり、その本を図書館島に届けた俺がその事を気付いた顧問の先生にとっと返してこいと怒られるのは明白だった。

「あ！ ちようどいいところに        って、なんでアンタがここに  
いるのよ……」

「部活だよ、部活。昨日、のどかと一緒に居ただろ？ あの時、のどかが持ってた女子中等部用の本を運ぶのを手伝ってやったんだけどのどかに返すの忘れてて図書館島に置いてきたからわざわざここまで返しに来たんだ」

右手に少し怪しい液体が入った試験管を持ったアスナが俺の存在に気づき、ジト目になったところで両手に持った本をアピールしてアスナの考えている事を否定する。

「それで？　ちょうどいいってどういう」

「

「そうそう、忘れてた。いつも飲み物奢って貰ってる代わりにコレあげるから飲みなさい」

「ふっっ」

お礼と言っ名の強制。

両手が本で塞がっていた俺はアスナの行動を止める事が出来ず、いきなり口の中に突っ込んできた試験管の中身をゴクリと飲み込んでしまう。

「どっっ？」

「どっっって何が！　何を飲ませやがった！」

「.....」

「.....？」

首を傾げて尋ねてくるアスナにキレる俺。そして互いに沈黙する。

「　　やっぱ効かないじゃない、あのバカ！」

次の瞬間、そう言い残してアスナは脱兎の如く走り出して何処かへ



行ってしまう。

一体何がしたかったんだ。

「あれ、九郎君やん。なんでこんなところにおるん？」

「ああ、このか　　って、顔が近い！」

走り去っていくアスナを見届けて首を傾げた俺は背後からかけられた聞き覚えのある声に振り向く。

振り返った先には後一步でも足を前に出せば唇と唇が触れ合う様な距離で俺の事を見ているこのか。いくら比較的親しい友人だったとしてもありえない近さに後ずさって距離を取った後、ふとアスナに飲まされた謎の液体が何なのか思い出す。

この時期にアスナが持っている謎の液体

惚れ薬だ。

「んふ……、ずっと思ってたけど九郎君で中々の男前やよね……」

それを証明するかのようにこのかの瞳はどこか虚ろでほんのりと薄赤くなっている頬を見ればいつものこのかでないことなどすぐに分かる。

いつも笑顔を絶やさず誰に対しても公明正大で慈悲を持って対合する少女。清楚にして可憐、まさに大和撫子と呼ぶに相応しい人物が近衛木乃香だ。

しかし、今のこのかはどこか妖艶で艶やか、一つ一つの仕草をとっても挑発的で男性の欲情を駆り立てる色香を放っている。

足の先からスカートの間に晒された健康的でありながら新雪の様に白く汚れを知らぬ柔肌、必要以上に主張せずとも少女ではなく既に女性であることをしらしめる胸の膨らみ、今まで　そしてこれからももう二度と見ることは叶わぬであろう妖艶で知性を捨てた雌の顔。

そんなこのかを見てクラリと意識の半分以上をこのまま状況に流されていいのではないかと肉欲を求める心の呟きが俺を誘う。

、何を迷う必要がある。外道最低系主人公であると自分が認めた。全てのヒロインを自分のモノとして己の欲求のはけ口として扱う。その為の世界、その為のスキル。

ゴクリと生唾を飲み込み、ふらふらとこのかに近付くと本を地面に置いてこのかの両肩を抱く。

「ん……………」

瞳を閉じて唇を差し出すこのかに答える様に顔を近付ける。

「ごめんっ!」

小さい呟きと共に頭突き。

「っ!」

その痛みでこのかに魅了されていた自分の心を覚醒。

今なら分かる、ここでもし状況に流されるまま肉欲に従い、このか

と事を起こしていたら完全に戻れなくなっていた。

本当の意味でこの世界の脇屋九郎は消え、前世の脇屋九郎が目覚めていた。

本当の意味で俺という存在が消えるかもしれない。

二重人格ではなく、意識と記憶を共有していながら前世と今では圧倒的に違う価値観を持っている俺は少しでも楽な方へ  
前世  
の方へ靡けば戻れなくなる確信があった。

俺だって女の子が好きだから。複数の女の子から言い寄られてみたいと考えた事もあるから。

だけど、洗脳紛いの恋愛は嫌だったから。

頭突きで目を回しているこのかを放っておいて、持ってきた本を回収するのを諦めて脱兎の如く走り出す。周囲に居た女の子の瞳が段々虚ろになっていたから。

目的地は職員室、そこになら魔法先生もいる筈なのでなんとかしてくれるだろう。惚れ薬なんて違法なモノを作ったネギちゃん？ がどうなるか分からないが歴史に名前を残すような人物の娘なんだから悪い様にはならないだろう。

廊下を走り抜け、すれ違う女の子達が振り向いて俺を見る。正直言っってこんな状況でなければありえない状況に少しだけ気分がよかった。

「もうすぐっ！」

目の前の階段を下りて、右に曲がって少し行けばそこが職員室。

「丸、面倒だ。意識を奪ってから、解毒しろ」

「ですが、マスター。その場合、彼が階段から落ちて怪我をする確率が80%以上ありますが……」

「構わん。元々教師でない若い男がここにいる事自体が間違つとる」

「え？」

気が付いた時には『何か』に躓いて、転んだ状態で階段に突っ込む。

そして衝撃。

「だ……れだ？」

「恨むなよ、小僧。この件が上にバレてあの娘に学園を去られたら堪ったもんじゃないからな」

薄れていく意識の中でロボロボしい女の子と不敵に笑っている金髪の少女を見た気がした。

第4話『惚れ薬とは男の浅ましい欲望の夢』の巻（後書き）

結局、階段から落ちました。

## 第5話『これぞほんとの過去ポである』の巻

「ふう、やつと終わった……」

テストの終わりを告げるチャイムが鳴り響き、テスト用紙を前に渡した俺はそのまま力尽きて上半身を机に委ねる。

階段から落ちて気絶している所を発見され、保健室で目を覚ました俺は大切な事を忘れている気がするけど全く思い出せずに終わった惚れ薬事件。何故か、廊下のだ真ん中に置いてあった女子中等部用の本はきちんと回収されていた。勿論、そんな所に置きっぱなしにした俺は先生に怒られたが。

それからというものの女子中等部には近付かない様にして過ごし、アスナとの世間話や図書館探検部の奴らとの日常会話で小テストやドッジボールで高等部と揉めたなど原作イベントが着々と進行しているのを確認しながらも平和な日常を過ごしていた俺は学生最大の敵である期末テストを戦い抜き、周りの友人が春休みだと盛り上がっている中で燃え尽きていた。

完全記憶能力　暗記系の問題には絶大な効果を発揮するが数学や英語等の知っているだけでなく、理解していなければ解けない問題にはあまり効果が無い。結局の所、現実はそうそう上手くいかずキチンと勉強しなければならない。

「で、今回の出来はどうだった？」

「一応、平均95点位は固いと思うぞ」

俺の隣で同じ様に燃え尽きていた司が身体を起こすと尋ねてくるので答える。

「はあ、やっぱり超さんと麻帆良学園学年1位を競い合う人の言う事は違うね」

「まあ、謙遜しても仕方ないしな。俺の場合は超と違って勉強が出来るだけで頭が良い訳じゃないけどな」

俺の場合は完全記憶能力を頼りにした勉強が出来るだけで別に頭が良い訳じゃない。理解力は人並みもしくは劣っているくらいだ。間違っても一聞いて十を知るタイプの人間では無い。

「それもそうなんだけどね」

俺が部屋で頭を悩ましたり、先生に理解出来ない所を尋ねて教えて貰っている場面を何度も見ている司はその言葉に苦笑する。

それでも自分で言うのはなんだが理解出来ない事を理解出来て、嬉しいと感じる俺は勉強する事に向いていると思う。

「そういえば九郎って春休みはどうするの？」

「一応、年末年始くらいは実家に顔を出そうと思ってるけど」

「了解、それじゃあ今年も去年と一緒に言う事で……」

中学生になり、寮生活を始めてからは用事が無い限り殆ど寄り付かない実家であるが年末年始の数日だけは仕方ないので帰宅している。

「はあ、今年も家族と過ごす年末年始か……」

「そうだね、今年も浮いた話が無かったね……」

「言っつなよ、寂しくなるだけだ……」

家族と過ごす事が憂鬱な俺の溜め息と全くアスナと仲が進展しなかった司の溜め息が重なる。

図書館探検部に所属する俺と剣道部に所属する司。どちらの部活も女っ気が無い訳では無いが互いに寂しい身の上だった。

「はあ、あいつ、もうそろそろ時間になるぞ……」

結局、超と同率麻帆良学園学年1位を取る事になったテスト発表を終え、平穩で忙しない日々を過ごしていた俺は両親と実家に帰る約束をした日になると前日に用意していた荷物を持って、麻帆良学園から外へ出る為の駅の改札口で時計を見て時間を確認した俺は溜め息を吐く。

「お兄ちゃん！」

そんな時、他人のフリをしたくなる様な声の大きさに突撃して抱き着こうとしてくる女の子から身体を横にずらす事で避けると頭を押さえる。



「アホか！ もうそんな歳じゃないんだから抱き着いてくるな！」

「ッ　　！　でもでも、最近全然会いに来てくれないし、お兄ちゃん分が足りないんだもん！」

頭を押さえた事でじたばたと目の前で暴れて頬をほんのり赤くしている女の子の名前は脇屋美穂。俺の二つ年下の妹であり、来年ようやく小学校を卒業するガキンチョである。身内の俺や前世の俺から見ても十分器量の良い顔立ちをしているのだが如何せん子供っぽ過ぎる。正にお手本の様な手の掛かる妹である。

「ほら、いくぞ」

「ちょ、一人で持てるってば！」

美穂の持つている荷物を引いたくる様にして奪うと改札口を通って電車に乗る。

もう子供じゃないだのどうのこうのと電車の中で熱弁する美穂の話を聞き流しながら電車で揺られる事数十分、実家の近くにある駅に着くと電車をおりて実家に向かう。

「ふう、やっと着いたか……」

歩く事数分、豪邸といわずともそれなりに大きい日本家屋である実家の玄関に着くと両手に持っていた荷物を置いて深呼吸。

「どうしたの？」

「いや、なんでもない。ただいま」

「お父さん、お母さん、ただいま！」

「お、ようやく帰ってきたか」

「はい、お帰りなさい」

玄関を開けて声を出せば顔を出すイケメンな父親に美人な母親。そんな理想的な家族にやっぱり俺は  
馴染めなかった。

「ねえ、お父さん、お母さん……」

「ん？ どうした？」

「寝れないの？」

深夜、人々が眠りにつき、深淵に潜む魑魅魍魎がうごめきだす時間、二人寄り添って月を見上げていたお父さんとお母さんを見付けた私は二人に声をかける。

「うつん、お兄ちゃんの事……」

私の言葉に優しかった二人が表情を真剣なモノへ変える。

「封印の事か？」

「うん……。今日ね、レジスト出来ただけど頭を撫でられた時にお兄ちゃん、無自覚でかなり強力な魅了魔法発動させてた。私は気を付けてたから良かったけど知らない人間なら魔法関係者でも危ないかも……」

「そう……か、そろそろ限界なのかも知れないな……」

「どうしてあの子だけ……」

私の言葉に目を伏せたお父さんと悲しそうに涙を流すお母さん。

お兄ちゃんにかけられた封印。私もお兄ちゃんと接する上でお父さんとお母さんから少しだけ教えてもらった。

お兄ちゃんは普通の一般人として育てられているが私たちの両親はマギステル・マギと呼ばれる一人前の魔法使いである。

そんな二人の血を引くお兄ちゃんは勿論、その身に魔力を秘めていた。否、『秘め過ぎていた』。

大戦の英雄として語り継がれるマギステル・マギの中のマギステル・マギ。ナギ・スプリングフィールドを軽々と超える魔力量、修練を積んでいないにも関わらず魔力量に匹敵する気の量。

産まれた瞬間からそれだけの才能を見せたお兄ちゃんだったがそれは才能ではなく、呪いと言っても良かった。

産まれたばかりのお兄ちゃんが魔力を　気を扱う術など知らず、その力が常に暴走していてお兄ちゃんは産まれてから一ヶ月程は常にいつ死んでもおかしくない状況だったらしい。そしてお兄ちゃん

は自らそんな生活に終止符をうつたのだ。

超高等技能 『気と魔力の合一』カンカホウ。お兄ちゃんは自我も無い赤ちゃんの頃からカンカホウを習得した。

そして容態が安定したお兄ちゃんは『生きる』為に魔力を、気を徹底的に封印された。

本来なら魔法世界史に名を刻む様な魔法使いになれてたであろうお兄ちゃんは強大過ぎる力とお兄ちゃん自身の命の為に完全に魔法から切り離された。

それで終わった筈だった。それで終わらなければいけなかった。でも、お兄ちゃんに宿っていた才能と言う名の呪いはそれだけでは無かった。

私が産まれて、お兄ちゃんが幼いながらに自我を持つ様になった頃、頭を撫でるという行為を覚えたお兄ちゃんが妹である私の頭を撫でていた時、お母さんが気付いたのだ。

お兄ちゃんが異性の頭を撫でている時、無自覚で魅了魔法が発動している事に。勿論、すぐさま封印されたらしいが被害は酷かったらしい。小さな子供が一つの行動に嵌まる。よく有る事でお兄ちゃんを通して、両親の目が届かない一般人だけの幼稚園は全滅だったらしい。子供大人関係なく、お迎えに来る他の母親も巻き込み、全ての女の人がお兄ちゃんに魅了されていた。

発見されてすぐに皆処置を受けたらしいけど、一番被害が酷かったのは妹である私で魂にまで『お兄ちゃんを愛している』と刻み込まれていた。今でこそ親愛としての好きにまで薄れてきたけど少し前

までお兄ちゃんの事を異性として愛していた。

解呪されているが多分、お兄ちゃんの被害を受けた殆どの子供は麻帆良学園にいる。被害を受けた人達は昔お兄ちゃんが好きだったという記憶は持っている。唐変木のお兄ちゃんが何気にモテる理由の一つだろう。

「今は見守るしかない。これ以上封印を重ねたら九郎の心も頭もぐちゃぐちゃになってしまう……。美穂、これからも九郎の事を気にかけてくれ」

「お願いね……」

「うん、大丈夫。私も女の子盛りの中学生になる前に結構解呪出来たから」

「む……」

私の言葉にお父さんが露骨に顔をしかめる。

「こら、あなた。美穂には小学校の六年間を棒に振らせたんだから少しは堪えてください」

「そ、それとこれとは話が違うんじゃないか？」

「あなた？」

「むむむ……」

そんなお父さんとお母さんのやり取りに私は笑う。

ねえ、お兄ちゃん。お兄ちゃんは魅了魔法を使わなくても  
こんなに愛されてるんだから。

第5話『これぞほんとの過去である』の巻（後書き）

主人公の想いと家族の想い、見事にすれ違っています。

第6話『金髪美女とクールでニヒルなナイスガイ、どちらが一般的な吸血鬼？』

最近はナイスガイな吸血鬼が少なくなっただけがします。



第6話『金髪美女とクールでニヒルなナイスガイ、どちらが一般的な吸血鬼？』

「なあなあ、知ってるか。桜通りに出る吸血鬼の話」

「ああ、あれだろ。満月の夜に桜通りを歩くとムチムチナイスバディのお姉様な吸血鬼に襲われるって話。綺麗なお姉さんならむしろ襲って下さいって感じだよな」

「あれ？ ツルペタ金髪幼女じゃなかったっけ、その噂」

「幼女だったらむしろ………襲う？」

「先生、ここに犯罪者がいます！」

「ふん、ロリの魅力に気付かぬ愚か者めがっ！」

「あ？ ナイスバディな大人のお姉様の方が良いに決まってるだろ、ロリコン！」

「胸なんてただの脂肪だろうが！」

「てめえ！ おっぱいにはなあ、男の夢と希望と情熱と浪漫がつまってるんだぞ！」

「ふ、歳をとったら垂れるだけだろ……」

「分かった、俺に喧嘩売ってたんだ、よろしい、ならば戦争だ！」

「だったら俺が第三勢力である絶対領域をペロペロしたい派を設立するぜ！」

「それなら俺もちうたんハアハア可愛いよ派を」

「俺も」

「俺だって」

「……………、はあ」

中学三年生、義務教育最後の歳でありエスカレーター方式とはいえ高校受験という人生のその後を決める選択を迫られる大事な時期で少しだけ大人になれる学年。

少しは落ち着けば良いものを教室を飛び交うクラスメートの会話は馬鹿丸出しだった。

「あれ？ どうしたのさ、九郎。参加しないの？」

「お前だって参加してないだろ」

「僕はほら、純愛推奨派だから」

俺の言葉に司は笑う。大人しい性格の割に司は年相応の馬鹿話が好きだった。

「俺はどちらかと言うと修学旅行がどうなるかが気になるよ」

「ああ、確かハワイか京都か日光かパリだっけ？ 修学旅行の行き先」

「俺は断然ハワイだな……」

修学旅行でハワイに行って何を学習するのかはよく分からなかったけど行けるならハワイが良かった。

「ああ、それで水着ギャルに手をつけるんだね」

訂正、司も十分馬鹿だったらしい。

「おら、お前ら、少しは静まれ！ 廊下にまで聞こえてきたぞ！」

ガラガラと教室の扉を開けて先生が入って来るとうるさかった馬鹿騒ぎも収まる。

平穏で騒音な日々を俺は過ごしていた。

「あゝ、分かっていると思うが明日には大停電が控えている。蠟燭やその他必要なモノは今日の内に買っておけよ、明日でいいやと思つてると後悔するぞ」

連絡帳を手を持った担任の先生がホームルームで告げる。

麻帆良学園の大停電、イベント好きの学生が多いこの学園ではたった数時間の停電を楽しむに学生が多い。

基本的に学生が停電中に外出する事は禁止されているが天体観測など人工的な光が活動の邪魔をする部活に限り、顧問の同伴がある場

合のみ真つ暗闇の中で活動する部活などもある。

「そついえば去年の蠟燭って残ってたっけ？」

「え〜と、どうだったかな？ 覚えてないや。新田先生の怒鳴り声以外……」

他にもいくつか連絡事項を読み上げている先生の話聞き流しながら司に尋ねると司も首を傾げる。

去年はクラスの連中と一緒に寮を抜け出して龍宮神社まで肝試しを行ったのだがマヌケな一人が見回りをしていた新田先生に見付かり肝試しに参加していた全員が一網打尽にされ連行された寮の玄関で停電が終わるまで新田先生の説教を受けた苦い思い出がある。

「ま、帰って確認してからでいいんじゃない？」

「あ、それなら僕の携帯に電話してよ。どのみち今日は部活が終わった後に買い出しへ行くからついでに買ってくよ」

「了解」

短い返事をしてホームルームが終わった事を確認すると部活へ行き、活動を済ませて寮にある自分達の部屋へ帰ると蠟燭が無かった事を司に伝えるとテレビを見て司が帰ってきて料理を作るまでの時間を潰す。

だけど司はいつまで経っても帰って来なかった。

走る。駆ける。馳せる。どれでもいい、足を動かせ、前を見る。あの化け物から逃げ出すにはひたすら逃げ続けるしかない。

「なんなんだ、お前は！」

「『桜通りの吸血鬼』  
いや、やはりこちらの方がしっくりくるな。悪い魔法使いだよ」

舗装された地面を蹴り、少しでも身軽になる為に捨てた夕食の材料を勿体ないと思いつながら『上空』に浮かんでいる外套を纏い、顔を隠した謎の人物に叫ぶ。

正体を隠した謎の人物の表情は見えずとも明らかに喜びの色が混じった意味不明な台詞。

「ちつ、逃げるのは止めた！」

逃げ回っていた足を止め、バクバクと心臓が鼓動しているのを感じながら最後の手段としてとっておいた背中に背負った竹刀を引き抜く。

この心臓の鼓動は緊張か、酸素を求めてかは知らない。ただ上空を飛んで一直線に追いかけてくる謎の人物から地面を走って逃げ出せる自信が無くなった。

「ほう、抗つか」

「当たり前だろ、魔法使い。非力で脆弱な一般人の恐ろしさを見せてやるよ」

竹刀を正眼に構え上空を見上げる僕と外套を風に靡かせて上空に佇む謎の人物。対立する一般人と吸血鬼で魔法使い。出来の悪いB級映画の設定みたいな現実に笑ってしまう。

こんな漫画みたいな現実に巻き込まれるのは僕の役割でなく呑気に僕の帰りと夕食を待ってテレビを見ているであろう九郎の仕事だ。

「何がおかしい？」

「可笑しいだろ、普通の一般人がよく分からない魔法使いと敵対する　　漫画の主人公みたいだ……」

僕の中に実は秘められた力とか、魔法使いにとって切り札となる能力があるとか、こんな危機的で現実味の無い状況で馬鹿な事を考えていた。

「ふん、現実と空想の区別もつかんのか　　安心しろ、お前は非力で脆弱な普通で普通の一般人だよ……」

次の瞬間、上空にいた筈の魔法使いが僕の懷に潜り込んでいた。

「がはっ！」

近くに来て初めて分かった体格差、だけど僕より小さな体格の魔法使いが無造作に放った掌底を受け止めた瞬間、受け止めたまま衝撃を受け流せず地面から足が離れると吹き飛ばされて桜の木に背中から叩き付けられる。

視界が霞む。朦朧とする意識。

「さあ、吸血鬼の食事でしょうか……」

魔法使いが外套を脱ぎ捨て姿を現す。噂通りの金髪に未発達な体躯。

「うわぁ、よりによってツルペタ金髪幼女かよ……」

なんで力を振り絞って告げた言葉がこんなのか分からない。

ザクリ……。

首に何か刺さった気がして僕は意識を手放した。

第6話『金髪美女とクールでニヒルなナイスガイ、どちらが一般的な吸血鬼？』

主人公の親友、原作巻き込まれ決定。



第7話『親友とライバルは似てないようで似ている』の巻（前書き）

むしろ、親友でライバルな人間の方が多いかも。

## 第7話『親友とライバルは似てないようで似ている』の巻

走れ、走れ、走れ。もう限界だと悲鳴を上げる心臓を黙らせ足を動かす。

学校を休み、学園を探し回り、司の行きそうな場所を探し回った。

「くそ、なんであいつが！」

一日中探し回り、既に夕暮れと満月が顔を覗かせる時間帯。

もどかしかった。そして司が帰らなかった理由は分かってる。『大停電』、『桜通りの吸血鬼』、キーワードは揃っている。

けどなんで　なんで司が『原作』に巻き込まれている。俺のせいなのか？　俺の持つ『主人公体質』が原作に介入する為のきっかけとして司を『原作』に巻き込んだ。

分かっているんだ、本当は。

俺の持つ『主人公体質』は全てのイベントに介入しようと無意識の内に動き出す。

俺自身に原作介入の意志がなくとも俺の何気ない行動を世界が都合の良い様に解釈してイベントへフラグを立てる。

関わるつもりは無かった。だけど前世の俺が望んだ『主人公体質』はエヴァ戦という原作でも重要なイベントを見逃すほど甘く無かつ

た。

俺が原作介入を拒むのなら周囲の人間を巻き込んででも俺に原作介入をさせる。

無理だ、無理なんだ。望んだスキルに振り回されているのは分かっている。けど司を            親友を見捨てる事は出来なかった。

前世の俺はダメなオタクで自分がダメな理由を周囲に押し付けて弱い自分を護る人間だった。勿論、友達も少なかった。

そんな俺に二度目の人生で初めて出来た親友だった。家族との絆を自分で手放したからこそ堪えられなかった。

友情という名の絆を手放す事など出来なかった。

「ああ、いいさ。介入してやるよ、くそっ たれ。原作破壊上等だ」

魔力とはなんぞや。

気とはなんぞや。

答えてくれる人はおらず、教えてくれる人もいない。

持っている筈の才能だけれど認識の仕方分からず、扱い方も知らない俺は無力な一般人と変わらない。

それでも想いだけは『登場人物<sup>キャラクター</sup>』に負けられない。

弱くていい、負けてもいい、命乞いしたっていい。

俺は原作から親友を取り戻すと決めたから。

俺が持つスキルのせいで俺の周りにいる人達が巻き込まれるなら原作の中で踊り続けていい。

俺じゃなくても前世の俺が望んだ自業自得だから。己の業に周囲の人間を巻き込めるほど俺の心は強くないから。

だから俺は歩き出した。男子が入る事の出来ない女子用の大浴場ではなく、唯一場所が判明している橋の所へ。

夢を見る。夢を見る。

夢とは人間の脳が睡眠を取りながら記憶を整理している時に見るモノだと聞いた事がある。

だけど今僕が見ている夢は現実味を帯びた非現実的な夢だった。

僕は着たことも無い執事服を着て電信柱の上に立って『命令』を待っていた。

大停電　　学園の明かり全てが消えて暗闇が学園を支配する中、僕の視界は昼間の様に明るく冴えていた。

来い。

『命令』が来た。

僕を呼ぶ声が聞こえてきて僕は動き出す。ピョンピョンと電信柱から次の電信柱へ。身体が軽い、空中を飛んでいると勘違いしてしまうほど身体は空を舞った。

何処に行くのか。テレパシーを使った訳でもないのに呼ばれた場所が手に取る様に分かる。

学園の外へ繋がる橋。

そこには僕の御主人様とその相棒、赤毛の少女とアスナさんがそこにいた。

「ッ！」

「ふん、ようやく来たか。さあ、どうする小娘達。仮契約を許したのは面倒だがこれで数は三対二……いや、仮契約をさせたならオコジヨ妖精もいるか。数の上では三対三、ちょうどいいじゃないか」

「誰なのよ!」

「……………」

「知らん、適当に見繕ってきた一般人だ。さあ、どうするネギ先生？ 佐々木まき絵や他の生徒達とは違い、こいつは真正正銘、無関係の人間だ」

「な、なんでそんな酷い事をするんですか!」

「何度も言っただろ？ 私は悪い魔法使いだからな」

聞こえてくる会話の意味が分からない。

僕は何の為に呼ばれてきたんだ。

「茶々丸、こいつと二人であのやかましい小娘を黙らせる。本命は私がやる」

「はい、分かりました」

「ッ！」

返事の代わりに声にならない声を上げる。

「それではいきますよ」

「きゃ！」

地面を蹴る。ビキリとコンクリートが砕けた音と共に吹き飛ばされたアスナさんを追撃。

「？」

「あ、あれ？」

何故か腕が止まる。彼女を傷付ける事を拒否している。

大切な何かを忘れている気がする。何を忘れている？ なんて忘れている？

分からない、分からない。

「戦意喪失を確認、催眠が甘かったようですね」

その言葉と共に横を誰かがすり抜ける。誰かがアスナさんを殴って蹴って吹き飛ばしている。

戦意喪失？ 馬鹿を言うな、僕はただ傷付けたくなかったただけだ。  
大好きなアスナさんを。

知らず知らずの間に涙が出てくる。

、嫌だ、嫌なんだ。好きな女の子を傷付けたくない。傷付く所をみたくない。誰かどうにかしてくれよ……。ヒーローみたいに現れて僕や彼女の魔の手からアスナさんを護ってあげてくれ。誰でもいいからお願いです。

僕は御主人様の命令でアスナさんを傷付けないといけないから。誰か僕を好きな女の子を傷付ける怪人として退治してくれ。

足が勝手に動く。地面を踏み締め、腰を落として腕力の一撃ではなく、身体全てを使った一撃を。

「ッ！」

アスナさんが僕の拳に目を閉じる。

ああ、僕は好きな女の子を傷付ける男なのか。

「馬鹿野郎！」

衝撃が迸る。僕の拳は突然アスナさんを護る様に現れた人物を殴り飛ばす。

殴り飛ばされた人物は地面をゴロゴロと転がって身体の至る所から血を流して立ち上がると意志の強い瞳を顔をこちらに向ける。

「九郎！　なんであんたが！」

「お前を傷付けさせる訳にはいかねえんだよ！」

「ッ！　だからってあんた、その傷……」

「あいつの拳でお前を傷付けさせたりはしねえ！」

自分を護った人間を見てアスナさんが目を見開く。その表情はどこかほんのりと赤い。

「……………アスナさんも『そう』なのか。」

いや、いいさ。僕のような怪人をやっつけるヒーローが九郎なら文句無い。

だから親友、お願いだ。

「止まらないんだ。九郎、僕をやっつけてくれ……」

「ああ、分かってる。アスナは傷付けさせねえし、お前も助ける……」



足がガクガク震えている。荒事などしたことないであろう九郎が全身を恐怖で震わせながらもアスナさんを護る様に彼女と僕の前に立ち塞がる。

九郎、やっぱりお前はヒーローだよ。

第7話『親友とライバルは似てないようで似ている』の巻（後書き）

絶賛、『主人公体質』発動中。

## 第8話『自分の汚さはあまり気がつかないものである』の巻

身体が恐怖で震えている。

恐い。帰りたい。

自分達の部屋で適当に蝋燭を並べて馬鹿話をしていたい。

身体の傷も痛いし、喧嘩のしかたなんて知らない。まして相手は全ての身体能力が自分より上。勝てない、絶対に勝てる訳がない。

それでも心に誓ったじゃないか、親友を取り戻すと。

心が奮えている。はちきれんばかりの怒りに奮えている。頭に血が上っている。

許せない、絶対に許せる訳がない。

司からアスナを絶対に護りきってみせる。

アスナの事が好きな司にアスナを絶対に傷付けさせやしない。

親友が泣いてるんだ。アスナの事を  
好きな女の子を傷付け  
たくないとおぼれながらも訴えている。

その想いを無駄にする事なんて絶対に出来ない。

身体が痛い。だからどうした。

勝てる訳が無い。だからどうした。

司の 親友の心が泣いているんだ。

俺は何をしにここに来た？ 簡単な事だ、親友を助けに来たんだ。

ああ、簡単さ。司の攻撃からアスナを護り、司の目を覚まさせてついでに茶々丸をぶっ飛ばす。全部終わったら俺のご飯を作らなかった罰として豪華料理を作らせる。それでいい……………それがいい。

親友の日常はそれでいい。暖かくて平和で馬鹿やって恋をして。

好きな女の子を傷付けたくないとか泣く様な人生を送らなくていいんだ。司にそんな人生は似合わない。

全ては俺が巻き込んだ。俺のせいで親友を泣かせた。全部俺のせいだから。俺が弱くて最低な自分を認める事が出来なかったから。俺の罪に司を巻き込んだ。

「ああ、認めるよ……………」

俺は最低最悪のくそつたれだ。

自分の弱さから逃げて、理解しようともせず、自分の弱さを認める事も出来ずに拒絶した。

だから全てを受け入れる。

だから全てを認める。

俺はどうしようもなく馬鹿で臆病な                      外道で最低な人間なの  
だと。こんな奴は俺ではないと拒絶する事はもう止める。

だから                      だからこそ俺は胸張って生きれる様に。

外道で最低最悪な俺だけど顔を上げて前を向いて、真っ直ぐ歩いて  
いけるように。

親友の想いだけは絶対に護ってみせる。

「だから……」

力があるんだ。始まりは外道最低で良い。

力はただ力。力の意味は人の意志、人の想いで変わるモノだから。

外道最低な力でも真っ直ぐ歩いていけばいつか誇れる力になると思  
うから。

「力を寄越せ、世界！」  
くそつたれ

誰も傷付かないで済む様に。親友が泣かないで済む様に。

片手を上げて世界に向かって吠える。

「ッ！」

身体に激痛が走る。封じられていた何かを食い破る様に。ガラガラ  
と何かが音を立てて崩れていく様に。

『本当にいいのかの？』

『ええ、お願いします。家内と決めた事です……』

これは追憶。崩れていく何かから溢れ出した記憶の断片。

『前大戦の英雄を軽々と超える魔力、気、そしてそれを安定させる為に身につけたカンカホウ。並の魔法使いなら一生賭けても至れぬ極致にいるこの子は魔法世界史に必ず名前を残す。絶対じゃ、未来永劫、悠久の時を経てもなお語り継がれる魔法使いとして歴史に名を刻む事の出来る人材じゃ。容態も安定しておる。このまま育てたとしても問題は無い筈じゃ。歳を重ね、技術を磨きさえすれば暴走する事もなくなるじやろう』

『それでも……お願いします』

『そうかね、分かった。この子の力は封印しよう。しかし一つだけ聞かせてもらえぬか？ 人を育てる教育者としてワシは正直、この才能を捨てる事を勿体ないと思っておる。その気持ちはワシより親である君達の方が強い筈じゃ』

『ええ、学園長の言う通り本当に悩みました。家内と何度も何度も相談しました。その結果、分かったんですよ。自分達は魔法使いである前にどうしようもなくこの子の親なんだと。確かに歴史に名を刻む魔法使いになって欲しいと思います。だけどこの子の人生は自分達のモノじゃない。この子のモノなんです。この子が自ら魔法に関わるなら全力で応援します。ですが魔法使いになる事前提示の人生をこの子に用意してあげたくない。一般人として育てて魔法に関わるのなら自分の持つ力の恐さを理解して欲しいんです。小さい頃か

ら馴れ親しんだ力ではなく、突然手に入れてしまった強大な力として……」

『その結果として性格が変わってしまったら？ 大きな力を手に入れて考え方が、性格が変わる事はよくある事じゃ』

『簡単ですよ、喧嘩します。親子喧嘩です。正しい事を正しいと、間違っている事を間違っていると。何度だってぶつかって分かりあります。人の想いの前では力など無力である事を教えます。この子を愛している父親として』

『そうか、それなら大丈夫じゃな』

「……………」

知らない内に涙が出ていた。俺は本当に家族から愛されていた。

身体の中が熱い。身体の痛みが引いていき、思考がクリアに。

世界が震撼する。

「膨大な魔力と気を確認、マスター！」

「ッ！」

茶々丸が目を見開く。司が声にならない声を上げてアスナへ拳を振り上げる。

俺はそれをスローモーション映像を見ているみたいにゆっくり流れている光景の様に感じながら司が振り上げた拳を右手で受け止める。

衝撃が迸る。地面が砕け、陥没する。だけど先程の様に吹き飛ばす様な事はなく、本当に軽いと思える一撃だった。

「……………ごめん、俺を怨んでくれ……………」

「ッ！」

逃げようとする司の頭を両手で押さえて呟く。そして頭突き。

頭がくらくらする。だけど、目の前で司は倒れて気絶した。

これで終わった。

次の瞬間、身体に激痛。

「うわああああ！　なんだよ、なんなんだこれ！」

身体が言うことを聞かない。不思議な力がとめどなく溢れ出してくる。

これが俺への罰？　不相応な力を望んだ俺への代償？

「ち、暴走か。オーバードライブ茶々丸、そいつの相手は私がする。小娘二人を押さええている」

「逃げる……………、死ぬぞ……………」

痛みに悶える俺の前にエヴァンジェリンが現れる。



怒りの矛先は俺自身にそして目の前のエヴァンジェリンに。司を巻き込んだのは俺だ。だけどこいつでもある。少しでも理性を失えば容赦なく襲い掛かってしまう。

「本気で言っているのか？」

俺の言葉にエヴァンジェリンが心底可笑しそうに笑った。

「てめえ！」

理性が切れる。襲い掛かる。

「え？」

凄まじい、目の止まらぬ速さ。だけど俺の拳は空を切る。

「どうした、何がおかしい？ 貴様の魔力と気、カンカホウには驚いたが自分の力も御せぬ小僧に私を傷付ける事など出来ん。術も技も知らぬ餓鬼が。スペック任せの力押しでどうにかなるほど現実は甘くない」

後ろにいる。そう認識した瞬間、頭に衝撃が走る。

「ッ！」

意識が途切れる。

「九郎さん！」

「九郎！」

俺の名前を呼ぶ声がする。

「落ち着いてください。暴走した彼の身体は既に限界でした。これ以上動いた場合、90%の確率で日常生活に支障が出る怪我をしたと思われます」

「それじゃあ……」

「ああ、勘違いするなよ、ネギ先生。こいつがどんな秘密を抱えているか知らんが立ち振る舞いからして一般人。私は悪い魔法使いだが自業自得とはいえ目の前で廃人になろうとしている人間を見捨てるほど屑じゃない」

もう無理だ。

俺の意識はそこで途絶えた。

第8話『自分の汚さはあまり気がつかないものである』の巻（後書き）

覚醒主人公瞬殺。強さとは心技体全て揃った状態だと思っんです。  
喧嘩もした事ない主人公がエヴァに勝てる訳ありません。

第9話『タイトルが思い浮かばないよ（笑）』の巻（前書き）

常にサブタイトルをつけれる人を尊敬します。

## 第9話『タイトルが思い浮かばないよ（笑）』の巻

目が覚める。

辺りを見渡す。

気が付く。

「え？」

身体のいたる所に包帯を巻かれた俺は両手両足に枷を身に付けた状態で寝かされていた。

気が付けば知らない場所にいた。いつかどこかで言った覚えのあるフリース。

石畳の天井に石で作られた壁と床、そして自力では開きそうにない木の扉。正しく牢獄とっていい部屋で俺は目を覚ました。

「ここは……」

天井の隙間から太陽の光が入り込んでいて薄暗い部屋を明るく照らす。周囲に人の気配は全く感じられず、俺が寝ていたベッドの上に病院でよく見るナースコール用のブザーがあった。

押す。押す。押す。何度も押す。連打する。イタズラをする様な歳ではないが何がどうなっているのか早く知りたいから。今がどんな状況なのか知りたいから。

そんな連打を続ける事一分前後、自力では開かないと思っていた木の扉がゴリゴリと音を立てて開く。

「こら、九郎。お前もいい歳なんだから少しは落ち着きを持て。ブザー鳴らしすぎだ」

「え？」

そこには苦笑しながら俺に手を差し延べる父さんがいた。

「なんで父さんが此处に……」

俺の両親が魔法使いだった事は追憶の中で臆げに思い出していた。だけど父さんはこの学園の関係者ではなかった筈だ。

俺自身にこんな拘束具を身に着けさせている辺り、俺の暴走を警戒して高畑先生か学園長が自ら会いに来ると思っていた。

「少し待つてろ。その話はもう少し落ち着ける場所に行ってから話そう。さあ、手足を出せ。仕方ないとはいえ大事な息子が罪人の様に扱われるなど父親として黙っちゃられない」

「あ、うん……」

聞きたい事は山ほどあった。だけど父さんの言葉に俺は頷く事しか出来ず、俺の両手両足にされた枷を父さんの持っていた鍵で解除していく所を見ていく事しか出来なかった。

「ほら、今から少し歩く。その恰好じゃあ歩けないだろうからこれに着替えろ」

父さんはそう言って服の入った茶色の紙袋を渡してくる。中には学生服と俺が好きなメーカーのスニーカー。

病院の入院患者の人が着ている様な服を脱ぐ。手足の見える場所だけでなく、身体全体にサラシを巻くようにして包帯が巻いてあった。

「ん、着替え終わったよ」

身体の節々が痛むので少しだけ手間取ったがそんなに時間も掛からずに着替えを済ませてスニーカーを履くと父さんに告げる。

「そうか、それじゃあついてこい」

言葉少なめで歩き出した父さんの後を追いつ、牢獄と思われる部屋を抜けて石畳の階段を上る。

「シスターシャーケティ、息子がお世話になりました」

「いえ、大事に至らず良かったですね」

父さんが階段の先にあつた扉を開けるとシスター服を着た何人かがこちらを見ていた。牢獄は教会に繋がっていたのか。

そんな事に関心しながら頷いていると父さんに頭を捕まれて一緒に頭を下げられる。

「迷惑をおかけしました……」

「迷惑かけたんですか？」

ゴンと頭を殴られる。痛いよ、父さん。だけど前世の記憶を思い出す前のやりとりを思い出して小さく笑ってしまう。懐かしかったから。

そんな父さんとのやりとりを微笑んで見ているシスターシャーケティとその後ろでクスクスと笑っている少女。一瞬だけ目があつた気がした。すぐに顔を隠す様に伏せたけど。

「それじゃあ……」

「ッ！」

父さんが頭を下げて教会を出るとそれに続く。

眩しい。

全然久しぶりでもないのに懐かしいと思える太陽の光だった。

「ほら、ここだ」

そう言つて扉の向こうに入っていく父さんを見届けてからゴクリと息を呑む。

教会から歩く事数十分、招かれたのは何故か女子中等部の学園長室であつた。

分かる。これから始まる会話で俺の将来が決まる。決まる？ 違う、決めるんだ。自分の意志で、俺の想いで。認めたじゃないか、俺は底辺の人間だと。後は這い上がるだけなんだから簡単だ。



「失礼します！」

「お兄ちゃん！」

「こら、美穂」

扉をノックして部屋に入る。

部屋の中には妹と美穂と声をあげる美穂を窘める母さんがいた。

「フオフオフオ、よく来たの……」

「へえ、ずいぶん大きくなって……」

「ふん」

他には笑っている学園長と目を細めて驚いている高畑先生、不機嫌そうに鼻を鳴らしてこちらを見ているエヴァンジェリン。

「ッ！」

その瞬間身構えようとしたが身体が痛くて動かなかった。怒りも沸いて来なかった。頭が冷えたのか、怒りなんて難しい感情を維持出来るほど頭が良くないのか分からないが心は穏やかとまで言わずとも平常だった。

だからこそ気付いた、麻帆良学園で最強クラスの人物三人。やっぱり警戒だけはしている様だった。

「脇屋九郎君。我々に尋ねたい事が山ほどあると思うが今は我々の話を聞いてくれんか。その上で質問があれば答えようと思うんじやがそれで大丈夫かの？」

確かにそちらの方が効率的だ。だけど一つだけ真っ先に確認したい事がある。

「分かりました。だけど一つだけ教えてください。あいつ司はどうなりましたか？」

「大丈夫じゃ。大きな怪我もしておらず簡単な処置をただけで君達の部屋で寝かせておる。今回の件については既に記憶処理を済ませて夢か何かを見ていたと勘違いするじやろう。諸星司君なら既に平穩無事な一般人の日常生活に戻っておる」

学園長の言葉にホツとする。司に好きな女の子を殴りそうになった記憶など無くていい。日常生活に戻るならそれでいい。

「ありがとうございます。それなら話を進めてください」

ペコリと頭を下げて学園長を促した。

## 第10話『魔法使いとは』の巻（前書き）

注・独自解釈している場面が多々あります。

## 第10話『魔法使いとは』の巻

「やはり一番最初から話すべきじゃな……」

ふさふさとした髭を撫でていた学園長は目を小さく細めると語り始める。

「大前提としてわしらは一般的に魔法使いと呼ばれる人間達じゃ。勿論、嘘や冗談の類いでない事は裏の世界を覗いたおぬしなら理解しておるであらう？」

学園長の言葉にコクリと頷く。今更だった。

風が。氷が。雷が。闇が。光が。

様々な魔法が目まぐるしく動き回っていた戦場の中に飛び込み、自らも不思議な力を行使したのだ。『原作知識<sup>チート</sup>』がなくなつて一般人には分からない魑魅魍魎が蠢く何かがある事ぐらいは簡単に想像出来る。

一般人が。普通の人間が決して踏み入れてはならない領域に身を委ねる人達。それが魔法使い。

「そして麻帆良学園は普通の学園であるのと同時に魔法使いの学校なのじゃ。大体は漫画などに出てくる魔法学校と考えてくれてよい。勿論、多少は違う所もあるが。そして魔法使いがやってはならぬ事もいくつかある。全てを説明するとそれだけで日が暮れてしまうので大雑把に説明するが魔法の秘匿及び心を操る魔法の使用、そして一般人を巻き込まぬ事じゃ。本来、一般人が裏の世界に巻き込ま

れてしまった場合、諸星司君の様に記憶処理をして日常生活に戻す事になっておる」

「つまり、本来記憶処理をされる筈の自分がその説明を受けている事自体が特例なんですよな？」

「その通りじゃ」

俺の確認に学園長が頷く。

「学園長、そこから先は自分に説明させてください。自分には九郎の親として説明する義務があると思っています」

「……………それもそうじゃな」

学園長が再び口を開こうとした瞬間、割り込む様に父さんが学園長に意見する。

真つすぐに学園長の瞳をみつめる父さんに多少の沈黙をした後、学園長は頷いて父さんに続きを促す。

「母さんがお前を産んだ時、俺は歓喜したよ。産まれ出た瞬間。お前と初めて出会った瞬間。俺は一目で確信したよ、お前は俺を軽々と超える魔法使いになるって。見るだけで分かったんだ。お前が天才だってこと。親の鼻肩目だけじゃない、魔法使いとしての理性でもお前は神様から最も才能を与えられたと分かったよ。だけど……神様が与えたモノはそれだけじゃなかった！」

父さんが拳を握り締める。悔しそうに。後悔してそうに。

「聞いたよ。お前、カンカホウを使った状態で暴走したんだってな。力を御する術を知らずとも意識があった状態で暴走させたんだ。赤ん坊だった頃のお前も当然の如く暴走させた。魔力を。気を。いつ死んでもおかしくなかった。いや、違うな。なぜ『死なないのか』分らないぐらいだった。泣いて喚いてお前は力を封印されるまで睡眠をとった事もなかったんだ……」

尽きぬ力。永遠に泣き続け、授乳すらままならず瘦衰えていく俺。

そしてそれを見せられ続ける両親の地獄。

産まれたばかりの子供が苦痛と共に泣き叫ぶ光景。

今なら分かる。両親が俺と美穂の事を愛してやまない理由の一つ。特に俺は不老不死のスキルを持つていなければ間違いなく死んでいただろう。自分が望んだスキルによって。

「そしてお前の容態が安定した時、俺と母さんはある決断をした。お前の魔力を。お前の気を。全て封印して裏の世界から完全に切り離すつもりだった。普通の一般人として育てるつもりだった。けどお前の中に眠っていた才能は封印程度で抑え切れるモノじゃなかった。知ってるか？ 何度封印しても漏れだしてくるお前の力はこの学園を護る結界の一部として使われているんだ。お前が一般人として生きていく為に裏の世界と切り離す事が出来なかったんだ。だからせめて俺達が魔法から離れた。万が一お前を狙う外敵が現れた場合に備えて魔法使いである事をやめなかったが魔法から距離を取った」

両親が麻帆良関係者でなかった理由。俺の為、それが答え。

「けど美穂は……」

美穂が魔法使いだ。この場にいるのだから明白だ。

「ああ、美穂も見習いとはいえ魔法使いだ。お前を魔法から隔離した様に美穂は魔法使いにならなければならなかったんだ。魂にまで刻み込まれた魅了魔法を解呪する為に……」

「魅了魔法？」

「そうだ、魔法使いが禁忌とする魔法の一つ。人の心を操る魔法だ。そうだな、異性の頭を撫でた時、あいては顔を赤らめなかったか？」

「それは……」

異性の頭を撫でる様な機会など日常生活でありはしない。しかしそれをさせるのが主人公体質であり、ナデポの力である。

「お前はな。異性の頭を撫でると無自覚で魅了魔法が発動するんだ。何故かは分からない。原因不明、理解不能、本人の魔力すら使わない。ただ魅了魔法が発動する。それが当たり前の現象であるかのようにな……」

だからこそ発見が遅れ、被害は拡がった。

「九郎、お前の才能は裏を返せばただの呪いなんだ。天から与えられた才能と共に背負わされた業なんだよ」

父さんの言葉は本当の意味での得ていた。神様から貰ったスキル、その為に失ったモノ。

「そして今回、裏の世界に巻き込まれた事で封印が破壊されて暴走した。その結果が今の状況だ」

そう言い切り、父さんは溜め息を吐く。

「俺はお前に一般人として過ごして欲しかった。ただどお前の才能はそれを許さない……。そうですね、学園長？」

「うむ、その通りじゃ」

父さんの言葉を引き継ぎ学園長が頷く。

「封印が破壊された今、これ以上封印する事はおぬしにとって良いことではない。身体と心が持たん」

力の封印。本人が力をコントロールして封印するならまだしも他人の力を封印するには術者自体にそれ相応の力と本人に一定の負担をかける事になる。

封印とは自然体であるべき姿を捩曲げているのだ。封印を受けている本人にも負担がかかる。間違っても健全な状態ではない。

これ以上強力な封印をするならそれこそ身体に支障をきたす『悪意』ある封印しかない。

「怨んでくれてよい、憎んでくれてよい。じゃが、おぬしの才能は既におぬし個人の意志でどうこう出来るレベルを越えておるのじゃ。最低でも力のコントロールと敵が現れた場合、時間稼ぎが出来る程度の實力は身に付けてもらっ」



提案ではなく、決定事項の通達。

ただ巻き込まれただけなら文句の一つや二つは出てくる。この状況を作った原因は自分でイベントに巻き込まれる『主人公体質』を望んだのは前世の自分だ。

それにもし一般人として過ごし誘拐されて魔力の塊と扱われる場合と一定の実力がつくまで強制的に修業させられる場合。

どちらがマシかは明白だ。

突き付けられた言葉に選択肢はない。優しい訳ではないが悪意ではない。せめて裏の住人になっただとしても日常生活が暮らせる様にする為の善意からくる命令だ。

「……………分かりました。ですが一つだけお願いがあります。俺はこいつに教えて貰いたい」

「なっ」

「ほう……………」

俺が望んだ魔法教師は我関せずといった感じで立っていたエヴァンジェリン。その事に父さんが驚愕し、学園長が髭を撫でながら俺の真意を探る様に目を細める。

指名された本人は愉快そうに笑っている。

「君にとって彼女は最も嫌う人物と思うのじゃがそれは何故かね？」

理由は単純だ。『別荘』がある。単純に強い。それに知識もある。

そして。

「こいつは自分で言ったんです。悪人ではあるが屑じゃないと」

良い人物か、悪い人物か。比べるまでもなく後者である。しかし、最低の人物か、そうじゃないかと聞かれたら答えにつまる。

それでも最低最悪の自分より遙かにマシだった。

「エヴァ……」

「ふん、まあ良いだろう。私が巻き込んだモノだからな。ただし、私が面倒を見るのは力のコントロールまでだ。それ以降の事は知らん。こいつもそれだけで私を選んだ訳じゃあなさそうだしな」

「ああ、お前ならいくら暴走して傷付けても平気だからな」

睨み合う。本当なら両親に師事を受けるべきだろう。けどもし暴走してしまった場合、迷惑をかけても心が痛まない人物はエヴァンジェリンただ一人だけだった。怒りはおさまっている。だが、怨んでいない訳じゃあなかったから。

なにより俺にとって両親は魔法使いではなく、普通の両親でいて欲しかったから。

「では、明日より脇屋九郎君を魔法生徒として扱う事。今回の件について発端となったエヴァンジェリン・A・K・マグダウエルに処

罰として魔法生徒である脇屋九郎君の指導を命じる！」

学園長がそう宣言し、話し合いは終了した。

「学園長、僕は学園長にお尋ねしたい事があります」

「何かね？」

「何故、ネギ君にエヴァをけしかける真似をしたんですか？」

二人の事情を知る者なら誰でも分かる。ネギ君をわざわざエヴァのいるクラスの担任にした事。いくらでも日程の変更を出来た筈なのにわざわざ満月の夜にエヴァの封印が弱まる大停電を決行した事。

間違いなく理由がある。

なにより許せないのが。

「関係の無い生徒を巻き込んでしまった！」

自分の元教え子だけじゃない。本当に無関係の生徒と平穏に暮らしていた九郎君も巻き込んでしまった。

「どうしてですか、学園長！」

ぶつかりあう視線。学園長は観念した様子で溜め息を吐く。

「本国は新たな『英雄』を求めておる」

「ッ！」

薄々分かつてはいた。だが、僕はそれを許容する事は出来なかった。

「学園長、貴方はネギ君の人生をなんだと思ってるんだ！」

英雄の血を引く彼女なら確かに新たな『英雄』としての素質は十分だった。

頭に血が上る。乱暴に扉を開けると学園長室から出て屋上に向かう。

「本当に……何をやっているんだ、僕は……」

タバコを吸い、足りなくなったニコチンを摂取しながら溜め息を吐く。

ネギ君は既に師匠に託された明日菜ちゃんと仮契約している。二人を繋ぐ縁はそれほど深いモノだった。

明日菜ちゃんの居るクラス担任をネギ君にすると言った時、きちんと反対するべきだったのだ。

僕は自分の不甲斐無さに再び溜め息を吐いた。

「高畑君もまだまだ若い……」

一人になった部屋で学園長がポツリと嬉しそうに呟く。

「だが、それでよい……」

何故ネギ君が魔法生徒ではなく魔法先生として麻帆良学園へ来たのか。一つは魔法生徒としてくるならネギ君を指導する魔法先生が必要になる。

英雄の血を引くネギ君の指導 間違いなく指導する魔法先生には様々なプレッシャーや利権が関わってくる事になってしまう。その様な混乱を避ける為に魔法先生としてここにいる。

もう一つは立場の違い。『英雄』は試練を乗り越える事で成長する。しかし、魔法生徒として扱えば魔法先生の保護下だ。魔法先生として扱った方が圧倒的に試練とぶつかる確率が高い。

そしてもう一つネギ君を『英雄』として育てる為の理由。

ここ麻帆良学園はこちらの世界では名の知れた魔法学校でもある。言い方が悪いが麻帆良という名のブランドが既に出来ている。

そこで英雄の血を引くネギ君が修業して普通の魔法使いになった場合、本国はどういう判断を下すか。

麻帆良学園は英雄の血を潰す所。

その場合、煽りを受けるのは他の魔法生徒達だ。英雄の血を腐らせる麻帆良学園が母校の魔法使い。

卒業生の全員があちらの世界に行く訳ではない。しかし、あちらの世界に行った卒業生はいい目で見られない。

麻帆良の名を落とす事は魔法生徒達の未来に影響してしまう。

一人の女の子の人生とその他大勢の人生。簡単な計算だった。

人を数で数えるのは自分の様に老いて責任を取る人間だけでいい。

現場の者が人を数で数える様になつたらおしまいである。

様々な不平不満を受け止めながら組織を円滑に廻す為に非情な判断を下す。

「わしも老いたの〜」

思い出すのは若い頃の自分。損得無しに感情の赴くまま、自分が正しいと思つた正義を貫いた結果がこの場所だ。

正しい心とは受け継がれていくモノである。

そんな事を考えて、学園長は小さく笑つた。

第10話『魔法使いとは』の巻（後書き）

うん、あんまり上手く纏めませんでした……。

第11話『一子相伝は男の浪漫』の巻（前書き）

一体、男の浪漫はいくつあるんだろうか……。



## 第11話『一子相伝は男の浪漫』の巻

「それじゃあ、私と美穂は買い物するから男二人で何処か行きなさい」

「……………まあ、荷物持ちよりかマシか」

麻帆良学園の中にある商店街にウキウキとした表情で突撃していく母さんと問答無用で連行されていく美穂を見守りながら父さんが溜め息を吐く。

学園長室で告げられた決定を受けて昼ご飯を外で食べると同時に行われた家族会議で俺に対しては今まで通り普通の両親として接してくれる事が決まり、美穂も同様だった。

ただし、エヴァンジェリンに師事を仰ぐに従い、何か少しでもおかしな事が起きたらすぐに連絡する様にと念を押された。

そんな重要な家族会議から1時間も経っていないのに普段通りのノリになる母さんと美穂は強くしたたかな女性であった。

「……………」

「……………」

取り残され沈黙する男二人。

「九郎。二人の前では黙っていたが俺はお前に聞きたい事がある。」

ここは少し場所が悪い。移動しよう」

そう言って父さんは真面目な表情を浮かべると歩き出す。

「よし、この辺でいいだろう……」

歩く父さんを追い掛けて辿り着いた場所は人の目が無い無人の公園。向かい合った父さんの瞳は真剣そのもので言葉で表さずとも分かる男と男の対面だった。

「皆、俺に遠慮して尋ねなかったから俺が代表としてお前に尋ねる。九郎、お前は何を『隠して』いるんだ？」

「ッ！」

父さんの言葉に息が詰まる。隠している事はそれこそたくさんある。だけどこれだけはいくらなんでも言えない。自分の息子が自分の家族を『他人の目』で見ているなんて絶対に言えない。

両親の想いを学園長室で教えられた時、良い家族だと思った。思ってしまったのだ。家族の一員として絆を感じたんじゃない。『第三者から見た他人の視点』で良い絆だと思ったのだ。前提からして他人事の様だった。

「……………いや、よそう。家族だからこそ言えない事も確かに存在する」

激しく動揺しながらも答える気の無い俺を見た父さんは小さく溜め息を吐く。

「ただど一つだけ教えて欲しい。お前、本当は魔法の存在を知ってたんじゃないか？　そうでなければおかしいんだ。確かに裏の世界を覗いたなら魔法の存在を認めるかもしれない。けどな、あんな説明されたら普通ドツキリか何かと認識する筈なんだ。いきなり魔法が存在するなんて結論には至らない。そんな環境でお前を育ててはないんだ」

魔法を。魔法使いに理解が有ったからこそその不自然。人間が空を飛んでいたとしても科学的な解釈をするのが普通である。人間が空を飛んでいるイコール魔法使いに直結する様な歳ではないのだ。

「……………薄々は。麻帆良学園で暮らせば嫌でも見えてくるんだ。明らかに科学的根拠が捩じ曲がつてるのを」

ギリギリの質問だから正直に答える。

学園のシンボルである世界樹。島一つが図書館の図書館島。殴っただけで人間を空に舞い上げる人間。高所から落とされてもピンピンしている人間。

麻帆良学園は裏の匂いがあちらこちらに紛れている。

「都市伝説みたいに。怪談話みたいに。常識の外側に存在する何かがあるんじゃないかって思ってた。今まで疑問に思っていた事も魔法って単語のおかげでなんとなく納得が出来たから」

「そうか、それなら良いんだ。お前は産まれつき妙に様々な縁があるからな。裏の世界に繋がる縁があって当然だな」

苦しい。

父さんが良い人間だと分かっているからこそ嘘を吐くのが辛い。前世の記憶があると言えたら。家族の事を家族として見れないと言えたら。

多分、すごく楽になるだろう。前世の俺から引き継がれた問題の一つが解決するんだ。受け入れて貰えるにしても。拒絶されるにしても。

だけど俺は臆病で答えを聞くのが怖いから。前世の俺が失ってしまった家族の絆を再び失ってしまう事が恐ろしいから。

絶対に言えない。

「そつだ、お前に渡しておきたいモノがある」

そう言つて父さんは懷から一冊の手帳を取り出す。

取り出された手帳は使い古されていながら丁寧に扱っていたのが分かる。

「これは？」

「手作りの魔導書だ。勿論、普通に売られている魔導書より質は悪い。そうだな、こう言つた方が格好良いか。そいつは一子相伝の魔導書だ。記されている魔法の名前は『精霊剣』。自分の得物に精霊を取り込んで属性を得る。一般的な魔法の一つではあるが手帳に記されている『精霊剣』は術式を分解して徹底的に無駄を省いたモノを古来より京都に伝わる退魔の剣術と織り交ぜたモノだ。既にオリ

ジナル魔法の域に来ている。脇屋の家系は代々才能に恵まれなくてな。すごい魔法を使えるのではなく、基礎の基礎を見直して自分なりの魔法に再構築する人間が多かったんだ。『術式の効率化』、脇屋の家系が得意な分野だ。そしてそれを十全に扱える才能をお前は持つてる。プレッシャーになると思うが覚えて言っぞ。俺はお前に期待している。だからお前も周りの人に頼れ。自分に期待している人間は助けを求めたら必ず助けてくれる筈だ」

重い。

軽い手帳の筈なのにすごく重く感じる。これが積み重なってきた歴史の重さと言う奴なのだろうか。

「ありがとう、父さん。大切にするよ……」

手帳を握り締めて父さんの方を見る。

周りに頼れる人が居るなら助けを求めよう。

「所で父さん、お小遣の直談判を……」

「バカタレ……」

一蹴、そして笑い声。

互いに笑いながら父さんと頷く。

やっぱりこの家族にシリアスは似合わない。

## 第12話『邂逅、原作主人公』の巻（前書き）

幼女ネギのイメージはそのまま学園祭編で女装させられた時のモノです。

## 第12話『邂逅、原作主人公』の巻

「ふあゝ」

目を覚ます。部屋の冷たい空気と布団の暖かい空気の間で心を揺さぶられながらも決意を固めると身体を起こして布団から出る。

台所では既にトントンと軽快な音を立てながら朝食の準備が進められており、台所に立って朝食を作っている司は機嫌良さそうに鼻歌混じりで歌っている。

「……………、はあ」

そんな光景を見て溜め息一つ。司は何事もなかった様に日常を過ごし、一般人の生活に戻っている。

それに関しては満足している。しかし、どうにもエプロンを身につけて朝食を作っているのが親友なのは少しだけせつなかった。

「あ、おはよう、九郎。朝食、食べていくんだろ？　少しだけ待ってよ」

振り返って俺が起きた事を確認した司は手際よく朝食を作ると皿に乗せて机に並べる。

「それじゃあいただきます」

「いただきます」

椅子に座ると二人で手を合わせてお辞儀する。

司が作る二日ぶりの朝食だった。

「二日も無断欠勤して本当にすいませんでしたっ！」

「いや、それは良いんだけどな。親御さんから連絡が来て自動車と接触事故起こして一日二日休むって聞いた時は驚いたぞ」

新聞配達のアルバイト、司を探す事で頭がいっぱいになり、すっかり忘れていた初日と気絶して寝過ごした二日目。無断欠勤について頭を下げて謝罪すると店長は安堵した表情を浮かべる。

「えーと、まあ、少しぶつかっただけなんですけど念の為にって事で一日だけ入院を……」

店長の言葉に頭を掻いて苦笑を浮かべながら手回しの良さに感心する。実際問題、交通事故の様な怪我はしていないが限界を越えて行使された肉体の疲労は大きく筋肉痛が酷くてたくさん湿布を貼っている。

「ま、無事ならそれでいいさ。あ、一応神楽坂にもお礼を言っとけよ。お前が休んだ二日も神楽坂がお前の配達区域まで配達したんだからな。……………後、お前、神楽坂に何かしたのか？」

「いえ、特には……………。後でジュースでも奢っておきます」



「ま、そうしとけや」

俺の事をすごい形相で見ているアスナに店長も俺も気付いており、アスナに聞こえない様な小さな声で会話する。

「ちょっと、九郎」

「はいっ！」

そんな事しているとアスナがこちらに歩いてきて、アスナの言葉にビクンとなって気を付けする。心境は色んな意味で先生に怒られるのを待つ生徒の気持ちだった。

「今日の夕方5時頃。世界樹の広場で大事な話があるから絶対に来なさいよ！ それじゃあ、新聞配達行つてきます！」

「ちょ！」

本人は全く気付いてないだろうが確実に誤解を生む様な台詞を言い捨てて新聞配達に行ってしまうアスナを止めようとするが間に合わない。

「お、俺も新聞配達に……………」

ガシッと掴まれる肩に振り返るとニヤニヤ笑っている店長と先輩達。配達開始時間ギリギリになるまで俺は有ること無いことを皆から尋ねられるのだった。

「はぁ、どうしたもんかね」

太陽が沈み出した夕暮れ時、世界樹の広場にあるベンチに座って溜め息を吐く。

アスナが俺を呼び出した用件は十中八九魔法関係の話だろう。その場合、俺が選ぶ事の出来る選択肢は二つ存在する。

一つは魔法を知っている事を認めて、今後魔法生徒として接する。

もう一つは知らぬ存ぜぬを繰り返して記憶処理を受けたふりしてアスナ達が気付くギリギリまで一般人として振る舞うか。

二者択一の選択肢であるが既に魔法生徒として扱われている俺が無関係の一般人を演じる意味はあまりない。

始めからわかりきっている選択肢なのだがやはり自分から非日常の人間だと認めるには勇気が必要だった。

そんな思考の海に溺れていると広場にアスナと赤毛の少女が姿を現して俺を見つける。

「ごめん、待った？」

「ん、いや別に」

こちらに歩いて来るアスナの言葉に首を振る。確かに少しだけ待ったが色々と考え事をしていた為に時間は気にならなかった。

「……………」

「……………え〜と、何かな？」

そんな中、一人でアスナの後ろに隠れたり、顔を覗かせて顔を赤らめたりとそわそわして忙しい赤毛の少女がチラチラと自分の事を見ていたのなるべく優しく声をかける。

「ひゃ！」

「ああ、もう！ じれったいわね。ネギ、あんたが九郎に話があるって言ったから呼んだんでしようが！」

声をかけた瞬間、悲鳴を上げてアスナの後ろに隠れた赤毛の少女はどこかのどかを沸騰させ、そんな赤毛の少女を見たアスナが少女の態度に我慢出来なくなったのだろう。少女の首根っ子を掴むとそのまま持ち上げて俺の目の前に差し出す。

「じ、じ、じ……」

「じ？」

「この間は九郎さんを巻き込んでしまつてすいませんでした！」

「……………え？」

いきなり頭を下げた謝る少女に面食らい首を傾げる。

少女が俺に謝る理由はすぐに想像がつくが順序が違う。本来なら俺

は幼女の名前を知らず、いきなり謝られても意味が分からない。

自分の名前を名乗る事もしなければ記憶処理をしたのかどうかの確認もしない。色々突っ込み所があるけど子供なんてそんなモノだろう。

「えーと、君の名前、教えてもらっていいかな？」

苦笑しながら幼女に自分の名前を名乗る事を促す。

「へ？ あ、すみません！ ボクの名前はネギ・スプリングフィールドと言います。アスナさん達のクラス、女子中等部の3-Aを担当しています！」

あわあわと慌てながら名乗る姿は幼女嗜好でなくとも十分愛くるしく知らず知らずの間に頬を緩めてしまう。

「そう、君が噂の……。一応、ネギ先生と呼べばいいのかな？ あれ？ まだ名乗ってないですね？ 脇屋九郎です。よろしく願います」

白々しい。

心の中でそんな事を思いながらも円滑に会話を進める為に初対面のフリ、もしくは記憶処理を受けたフリをして名前を名乗っておく。

「はい、よろしく願います！」

パツと表情を明るくさせて頭を下げる幼女      ネギ先生に苦笑を浮かべる。

「すみませんでしたって事は昨日の事でいいのかな？」

「はい、そうです。ボクのせいで九郎さんとそのお友達を巻き込んでしまつて……」

「いや、それは違うよ。ネギ先生」

ネギ先生は一体何を言っている。確かにイベント自体は彼女の為に用意されたモノだ。だけど、俺と司が巻き込まれたのは俺の『主人公体質』のせいだ。

ネギ先生が俺に謝る理由はない。俺はいずれどちらにせよ魔法関係に巻き込まれた筈だ。謝るなら司にして欲しいが司もせっかく魔法関係から切り離されたのだ。ネギ先生を会わせる訳にはいかない。

「司は 俺の親友は確かに巻き込まれただけかもしれない。だけど俺は君達が戦っている事を確認してからあの場所に飛び出した。怪我をする覚悟ぐらいはしていたからね。君が気にする必要は無いさ」

「で、でも……」

「そうだが、姉貴」

ネギ先生の謝罪をやんわり否定するとネギ先生が少しだけ渋る。そんな時、何処からともなく現れた見た目が愛くるしい白い獣がネギ先生の肩に居座りながら俺の言葉を肯定する。

「俺っちの名前はアルベール・カモミール。猫<sup>ケット・シー</sup>の妖精に並ぶ由緒正

しいおこじょ妖精さ。その旦那、魔法を使って肉体強化してたぜ。  
大方この学園の魔法関係者って所じゃねえか？」

「へえ、本当に動物が喋ったよ。カモでいいか？ その予想はちょっと違うな。俺の両親は魔法関係者だったらいいけど俺は一般人として育てられた。魔法関係のトラブルに巻き込まれた事は今回が初めてだ。一応、今はカモの言う通り、見習い魔法使いとして魔法関係者になってるけどな」

愛くるしい小動物が人の言葉を話す事に驚きながらカモの予想を否定して自分の現状を告げる。

「ふーん、なんで旦那ほど強力な魔力を持つてる人間が一般人なんかに？ 少しだけだったが魔力に関しては姉貴の数倍はある様に感じたぜ？」

「さあ？ ただ強大過ぎる魔力を持っていたせいで健康に障害が出たから封印されたとは聞いている」

「ふーん、ま、そんな事は良いんだけどよ。ねえ、姉貴。俺たちから提案なんですがこの旦那とブチューと仮契約したらどうですかい？ 旦那は魔法使いとしては姉貴以下ですが魔力容量は遥かに上ですぜい。旦那を主人として姉貴を魔法使いミニステル・マギの従者に。旦那から受けた魔力補給で姉貴がアスナの姉さんに魔力補給。完璧な作戦じゃないですか」

「な、ななな何言ってるのさ、カモ君！」

「こら、エロガモ！ アンタね、言っていていい事と悪い事が！」

「おやゝ、もしかしてアスナの姉さん、この旦那に脈ありなんすか？」

「え？」

「ち、違つに決まつてんでしょうが！」

、何を言っているのか聞こえない。アスナとネギ先生が顔を赤らめているのは確認出来るが小さい声でしている相談話までは聞こえてこない。

「……………はあ」

いつのまにか俺を置いてきぼりにして語り合っているアスナ達を眺めながら自分はどうしたらいいのかと思って溜め息を吐いた。

第12話『邂逅、原作主人公』の巻（後書き）

私生活が年末年始に向けて忙しくなってきたので出来て今年中の更新は後、一回程度だと思います。



第13話『修業とは過酷なモノである』の巻（前書き）

独自解釈が多数あります。

### 第13話『修業とは過酷なモノである』の巻

結局、ネギ先生との会談はネギ先生の謝罪と今後魔法関係で困った事があつたら相談して欲しいという社交辞令で終わった。

本当に会って謝罪をしてきただけであり、少し何かしらのトラブルが起きると予想していたので拍子抜けした。

どちらにせよこつちにも予定が有ったので都合が良い。

「え」と、絡繰茶々丸さんですか？ 待たせた？」

既に辺りは夜の暗闇に包まれており、住宅地から少し離れた場所にある橋の上、川を眺めている茶々丸を発見したので声をかける。

「いえ、私も今来ただけです。それに約束の時間より10分早いので問題はないと思います。一応、確認しておきますが麻帆良学園男子中等部3-B、脇屋九郎様でよろしいでしょうか？」

茶々丸の確認に頷く。エヴァンジェリンの住むログハウスが何処にあるか知らない俺は案内役として茶々丸とこの場所で待ち合わせをしていた。

「はい、そうです。明日からは自分で通うので今日は案内をよろしく頼みます」

頭を下げると茶々丸は頷いて歩き出す。

「……………」

「……………」

エヴァンジェリンが待つログハウスまでの会話は無言。カツカツと地面に敷かれたコンクリートを歩く靴の音だけが聴こえてくる。

気まずい。本当に気まずい。しかし、仲良く語れる共通点など茶々丸との間には存在しない。

「どうぞ、着きましたよ」

会話する事を諦めて道を覚える為にキョロキョロと周囲を見ていた時、茶々丸から声がかかり前方に木造のログハウスが見えてくる。

「それじゃ、お邪魔します」

ログハウスの前に立って先に入って行った茶々丸の後を追う様に頭を下げながら玄関をくぐる。

「ふん、ようやく来たか……。説明は後だ。黙って私についてこい」

そこにはファンシーなぬいぐるみに囲まれて高そうなソファアに座ってこちらを見ているエヴァンジェリンがいる。

視覚だけで楽しむならこれ以上無いくらいお似合いであろうが映る金髪の少女が起こした事を思うと今でもふつつつと怒りが沸いて来る筈だ……………多分。

俺は怒りなんて感情を維持出来る人間ではないし、今から一応教えるを請う間柄になるのだ、後ろ向きな感情は持っていない方がいい。

「ここだ」

エヴァンジェリンがソファァーから立ち上がり、地下に入っていくのについていくとある場所で立ち止まる。

そう告げるエヴァンジェリンの前には大きなガラス瓶の中に精巧につくられた建物のミニチュアが存在する。

「早く入れ」

ドンツと腰の辺りを蹴られて油断していた俺は前のめりに倒れて地面に手をつく。

「ッ！」

手をついた地面は既に今まで居たログハウスの木で出来た床ではなく、手に伝わる感触が冷たい石畳の床になっていた。

やはり知識として知っていると体験するのではかなり違う。

「ほら、何をいつまでその状態でいるつもりだ。早く立ってキリキリ歩け」

いつのまにか背後に転移していたエヴァンジェリンと茶々丸の二人は横を通って中央に存在する建物へ向かって歩いていく。

「……………」

立ち上がり呆けていた自分の頬をパシリと叩く。

「よし！」

この一歩から始まるのだ。自分の能力に飲み込まれる事なく、真つ直ぐ前を向いて歩いて行ける様に。

そして俺はその一歩を踏み出した。

「さて、これから貴様に稽古をつけてやるのだがまずは血を抜かせて貰おうか」

「ッ！ やっぱり吸血鬼なのか！」

修業開始の初っ端、血液を求めるエヴァンジェリンに身体を強張らせる。彼女に師事する上で血を吸われる覚悟はしていたがいざその時になるとやはり尻込みしてしまう。

献血などで血を抜かれる感覚はいつまで経ってもなれない。むしろ嫌いだ。

「違う！ 血液検査だ。一応、貴様の魔力と気が封印される以前までのデータはじじいから貰っているが十年以上前のデータなどあてにならん。貴様に向き不向きな属性、正確な魔力容量、血液を調べればわかる事は数多く存在する。今後指導する上で得意な属性と不得意な属性を把握しておく事は当然だ。勿論、貴様が進んで血液を献上するなら話は別だが？」

『原作知識』<sup>チート</sup>のおかげで中々指導者として優秀だと思っていたがス

ラスラと説明してくれる辺り、予想通りである。

勿論、最後の台詞はお断りであるが。

「ん？ 教えてくれるのは魔力のコントロールだけじゃなかったか？」

「馬鹿か、魔力のコントロールとは即ち魔法を扱う事だろうが。今の貴様でも馬鹿魔力でどんな魔法も使えるが別に扱える訳じゃない。貴様は黙って私の指示に従え」

「……………」

まあ、エヴァンジェリンの正論である。

「九郎様、申し訳ございませんが腕を出して貰ってよろしいでしょうか？」

「わ、わかった」

いつのまにか注射器やらなにやらを準備していた茶々丸の声に自分の声が引き響っている事を理解しながら答える。

目を閉じてなるべく力を抜く。チクツと針が刺さった感触と共に言い表せない脱力感が身体を襲う。

「茶々丸、それぐらいでいい」

「はい、マスター」

その言葉と共に妙な感覚が無くなり目を開く。

そこには片手に俺の血が入っている試験管を持つエヴァンジェリンがもう片方の手に少し古ぼけた本を持っている。

「そら、それでも読んで気とは　魔力とはなんたるかの勉強をしておけ。私はこれからこの血液の検査をしてくる。質問があれば茶々丸に教えて貰え」

そう言って持っていた本を手渡してきたエヴァンジェリンはそのまま試験管を片手に家の奥へ行ってしまう。

「……………」

「どうかなされましたか？」

渡された本のタイトルは『五歳から始める魔法講座』。

確かに魔法関係の知識など存在しないのだが妙な敗北感だった。

「ふーん、そういう事か」

本のページをぺらぺらとめくり、本の内容を把握して頷く。

流石、『五歳から始める魔法講座』。悔しいがイラストなどを交えた説明は本当に解りやすかった。

つまり、俺が無自覚で使っていた魔力とは森羅万象全てに宿るエネルギーであり、それを体内に取り込み精神力で魔法と呼ばれる現象に加工するモノらしい。そして一度に取り込めるエネルギー量を魔力容量とするんだとか。

現象に作用するのだから科学的な拘束は存在せず、だからこそ魔法なのだと。

それに比べて気は所謂、生命力と呼ばれるモノを体内に循環させる事でエネルギーを得るモノらしい。

自然的エネルギーと生命的エネルギー。大雑把に言ってしまうとそれが魔力と気の違いだ。

本を読み進め、解らない所を茶々丸に尋ねて自分なりにかみ砕いた結果、魔力や気の概念的なモノは理解出来た。

「ほう、もうその本を読み終えたのか。メモを取るとは感心だな……」

本を読み始めて既に三時間。茶々丸に言っただけペンとノートを貸してもらい、自分なりに要点を纏めてノートに書き込んでいると今までずっと家の奥にいたエヴァンジェリンが姿を現す。

「ま、癖みたいなもんかな。今日はこれでお開きか？」

伊達に勉強が出来る訳じゃない。手で書くという行為の重要性くらいは知っている。

あ、そういえば別荘について尋ねる事をすっかり忘れていた。この



ような原作を知っているからこそその何気ない対応を父さんは怪しんだんだろう。

「ふん、そういえば別荘の説明はまだだったな。この場所は一度入ったら一日経つまで外に出る事が出来ん」

「えーと、学校があるんだけど？」

「それには及ばん。日本の昔話に浦島太郎の竜宮城があるだろう。ここはその逆だ。外での一時間がここでの一日と言う訳だ。貴様の予定に合わせた一日四時間の訓練もここで行えば四日分の訓練になる訳だ」

さあ、驚けと言わんばかりに胸を張るエヴァンジェリンの対応に困る。確かに驚くべき事ではあるのだがエヴァンジェリンに師事した目的の一つがこの別荘なのだから。

「つまり精神と時の部屋って訳か……」

ギロリと睨まれたが解釈としては間違っていなかったので訂正されなかった。

「ふん、まあいい。それで血液検査の結果、貴様の向いている属性を調べたのだが」

ゴクリと息を呑む。自分の得意な属性とかすごく興味がある。ぶっちゃけ愉しみだ。

「貴様に向いている属性は存在しない」

「……………え？」

「いや、この言い方は誤解があるな。貴様は全ての属性に対してフルットな訳だ。どの属性も鍛えればそれだけ伸びるだろうな。それでどうするつもりだ？」

「どうするとは？」

質問の意図が掴めない。

「貴様が今後どの属性をメインとして扱っていくつもりかと聞いている。一応、言っておくが全ての属性を満遍無く鍛えようとは思わないよ。ゲームでもよくあるだろう。万能型と癖の強い特化型。本当に強い者とは一つの事を極めた奴の事だ」

エヴァンジェリンの言葉に頷く。相手より色々劣っていたとしても自分なりに絶対勝てる自信があるならその強みを全面に押し出せばいいだけの話である。

「因みに得意な属性は？」

「私は氷と闇属性だ。勿論、貴様がなんでもいいと言うのなら私はこの二つをメインに貴様を指導する。わざわざ不得意な属性を教えるより何十倍も効率的だ」

「……………」

確かにエヴァンジェリンの言う通りだ。しかし、闇属性とは流石に家族が心配する。

「ふん、闇属性が心配か？　いいか、元々闇属性とは」

そこから始まるエヴァンジェリンによる闇属性講座。

元々、闇属性とは負を司る属性ではなく、恐怖とやすらぎを与える属性なんだとか。

人間が太陽が煌めく昼間眠らない様に。夜の暗闇に怯えながらもぐっすりと寝れる様に。

闇属性が負の属性な訳ではない。修羅の道に堕ちた人間が本能的にやすらぎを求めるから闇属性を選ばらしい。

しっかりと自己を持っていれば闇属性も属性の一つに過ぎない。

それがエヴァンジェリンの弁である。

なんだか上手く丸め込まれた様な気がするけどエヴァンジェリンの説明に納得した自分がいる。

「そうだな、氷と闇属性をメインとしてサポート程度に風でも使える様にしておくか」

エヴァンジェリンの言葉に頷く。魔法関係は右も左も解らないのだ。おとなしく従った方が良い。

そして俺の教育方針の一つが決定した。

「……………、エヴァンジェリンの「リアル育成シミュレーションRPGだな」と言う呟きは聴こえなかった事にして。

### 第13話『修業とは過酷なモノである』の巻（後書き）

主人公は気付いていませんがスキルに『無限の修練』があるのでエヴァの台詞はあながち間違いじゃありません。

『無限の修練』は主人公の成長をいわゆるゲームの経験値制にするようなモノなので。

ふと気が付いた。始動キーを全く考えてませんでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0619z/>

---

とある外道最低系主人公の話

2011年12月25日12時50分発行